学校征服計画H

のみのみの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校征服計画H

【Nコード】

N5521G

【作者名】

のみのみの

【あらすじ】

とある男子高生の学校を征服するまでのながーい道程のH版^{ハイレム}。計画は立てるのに中々それを成功させることができないにも拘らずいつの間にか彼は学校の（いい意味で／悪い意味で）注目的になっていた。そんなこんなで進む計画は成功するのか？

プロローグ（前書き）

プロットも何も考えていません。

ノリで進みます。たぶん。

カテゴリに「ファンタジー」とありますが、魔法とか出てくるのは、
ずーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーと先になると思います。・・・魔
法使いが出てくるのはもう決定事項なんです。

プロローグ

ドン

俺は誰かとぶつかった。

季節は春、時間は朝。最近の温暖化のせい、桜は既に散っていた。

「大丈夫？」

倒れなかった俺は優しくそのぶつかった相手に手を差し伸べた。

何だか声が誰かと重なった気がしたが、気のせいだ。気のせい。

「イテテ。大丈夫だよ、昭」

そのぶつかった相手は誰かに向かってそう言う俺の手を取らずに立ち上がって、スラックスの汚れを払いながら誰かに微笑みかけた。

そして、さつきから茫然自失状態の俺を見ると、二人揃ってお辞儀をしてきた。

「ごめんなさい」

「兄が失礼しました」

そう言うのと、ささっとその場を離れていった。

俺は一糸乱れぬその様に驚いた訳ではない。制服が俺と同じ高校のものだったからでもない。二人の背が異常に低かったからでもない。兄と呼ばれたのが女に見えたからでも、照と呼ばれた少女の顔が赤くなっていたからでもない。二人が美の付くカップルだったからでもない。カップルの容姿が同じだったからでも、もちろんない。俺はただ、ただ単に自分の完全無欠の計画の出鼻を挫かれたこと。ただそれだけの事で、茫然としていた。

俺の計画。

それは『学校征服計画』だ。

なに、何て事は無い。ただ学校を征服すればいいだけだ。

なぜそんな事をするかって？

そんなのは簡単だ。

そう、ただ単に、面白そうだからだ。

理由なんて、それで充分だよな。

ちなみに、俺の名前は『東条都霧』。今年度から 高校のピカ
ピカの一年生だ。

みんなが俺に服従する日は、そう遠くはない。

待っている、全校生徒諸君。待っている、未来の俺。

第一章 クラス征服 プロローグ

そもそも今朝は、一人で登校中の女子高生とぶつかる予定だったのだ。

よくあるだろ。登校中にぶつかる男子高生と女子高生の恋物語。別に、俺は恋をするつもりは毛頭ない。もう一度言うが、毛頭、無い。ただ、知り合いの多さは目標達成の為に必要である。

それなのに、今朝は男子高生とぶつかったばかりでなく、友達になることすらままならなかった。

これは失敗だ。

まあだが、そんな事で気落ちをする必要もないだろう。これから失敗しなければいいのだから。

まずは第一の計画『クラス征服』から始めようではないか。

ということ入学式。

体育館で行われるそれは色々と重要だ。

俺の第一印象を全校生徒と職員に正しく植え付けるだけでなく、その人々一人一人の容姿を覚えるのだ。

支配者たるもの被支配者全員を知っていなければならないだろう。

「新入生代表、東条都靄」

「はい」

司会進行役の教諭が俺の名前を呼んだ。元気良く返事をして立ち上がる。

俺はこの新一年生代表という立場を確保することに成功していた。無論、これは下準備に過ぎない。これから話す、そう、俺が全校生徒の前で話すというその事実、そして、この場でどれだけ人脈を作る基礎を築く事ができるかが重要だ。

俺は沢山の視線を感じながら、ステージ上にゆっくりと上がる。

演説台のような幅広低めのテーブルを半周して、テーブルに乗っ

たマイクを挟んで全校生徒と向かい合う。

生徒が、教師が、俺を見ていた。

それを心地よく感じながら一度礼をし、何回も練習した文を話した。

「さく」

「Zzzz...Zzzz...」

一瞬にして、体育館全体が静まりかえった。突然の事態に、俺はつい、本当につい、声を荒げてしまった。今朝の計画倒れも効いていたのかもしれない。

「そーそー！」

俺の言葉に被るように、キーンという嫌な音が鳴り響いた。

その躰をかいていた生徒は無言になり、他にも寝ていたと思われる十数人が顔を上げた。だが俺はキーンという嫌な音を聞いてうずくまり、そして二つも失敗してしまった事を短時間の間だけ後悔していた。

一々説明するが、一つは怒鳴り声を出してしまった事。これでは好印象は抱かないだろう。そしてもう一つはこうしてうずくまってしまった事だ。俺は黒板を爪でギーしたような音は苦手なのだ。これで弱点を知られてしまったかもしれない。

ステージ袖を見ると生徒会役員の人だろうか、小柄な女子生徒が俺を促していた。早く喋れ、という事だろう。

人に従うのは癪だが、こうなっては仕方がない。自業自得だ。

シャツと立ち上がり、一度咳払いをする。そして体育館を見回してから再び話した。

「では、改めて。桜も緑の息吹が映える今日この日、僕たち312名はここ 高校に入学しました。この良き日に僕たちは悦びを持ってこの学校に登校し、そして無事入学式を迎えることが出来たことを嬉しく、そして誇りに思います。中学校よりも更に高度な授業、待ち受ける数々の行事、そして何よりも、これから三年間を一緒に過ごす多くの友との出逢い。僕たちはこれらを楽しみにし、これか

らの学校生活に希望を持っているはず。僕の希望は学校に在籍する全ての生徒と仲良くすることですが、皆さんは一人一人また違った希望を持っていることでしょう。その希望を忘れずにこれから三年間を充実の中で過ごし、より活気溢れるものにしていきましよう。以上で、挨拶を終わりにしたいと思います。新入生代表、東条都露」

一歩下がり、軽い会釈程度の礼をする。

いつの間にか鳴りだした拍手を全身で感じながら、俺はもといた席に戻っていった。

第一話 入学式後

入学式が無事に終わり、ホームルームの為に各クラスに移動した。俺は全9組中の7組だ。

教室に入ると半分程の生徒がいた。予想通りその中の半分程がグループを形成していた。多分、中学校が同じ生徒だろう。

「よろしくー！」

と元気良く言ってみると、何人かは返事を返してきた。その中でも近くにいた長髪の女子の反応がよかった。

「あ、君、さつき代表やった東条君だね。君の席はココココ」

そう言って彼女は自身の左隣の席を指差す。

「君は？」

そう聞きながら、言われた席に彼女と向かい合うように座る。

「私の名前はね、瀬賀井せがい妹子いもこだよ。初めまして」

「こちらこそ、よろしくね、妹子ちゃん」

ぼっ。バン。ガラピシヤはああー！ガラガラはい……。みゃおう。

ん？ZZZZ…。キヤー！

俺が言い終わると同時に、複数の事が起こった。

効果音のみだとよく分からないので、順番に解説をする。

始めの、ぼっ。は妹子ちゃんの顔がなぜか真っ赤に染まった音。

次の、バン。は前の方の席にいた金髪女子が机を両手でど突いた音。

ガラピシヤはああー！は後ろの扉を乱暴に開けて入ってきた女子が俺を見て、あー！と叫んだ所までの音。走っていたのか息が切れている。

ガラガラはい……。は前の扉をゆっくり開けて入ってきた気弱そうな先生が教室の様子を見ての一言。

みゃおう。はどこから入ったのか、猫が跳んだ時の鳴き声。

ん？は顔をさつきまで伏せていたが煩かったからか教室を見回す

男子。

Zzzz...。は入学式の時と同じ女子生徒の鼾。
キヤー！は猫がいた事に驚いた女子の叫び声。

俺は猫と金髪美女を置いておいて、まずは扉を乱暴に開けた女子を確認する。

えっと、小柄で美少女のその女子には、見覚えがあった。

「あ、君は今朝の」

「あんだ、誰？ てゆうか、そこ私の席なんだよな。ドケ」

俺はその今朝とは全く違う彼女の雰囲気気押しながらも、妹子ちゃんに視線で助けを求めた。

だが妹子ちゃんはそんな俺を完全無視だった。

仕方がない。これも何かの縁だ。

そう思っただけ気持ちを切り替え、立ち上がった時だった。

「ちよつとあなた、都霧様に向かって何て口のきき方を」

声のしたほう、つまり俺の後ろを向くと、例の金髪女子が仁王立ちしていた。これが真正銘の仁王立ちと言わんばかりに。

扉を乱暴に開けた女子は意外と冷静で、俺に小声で尋ねてきた。

「知り合いか？」

「いや」

「大変だな。あと、あんだの席は一つ前だ。よろしく」

「あ、ああ。ありがとう」

彼女のことを聡明だと見直しながら、こそこそと前の席に移動した。

彼女は妹子ちゃんと挨拶をしたので友達なのだろう。

「　　ということですよ。分かりましたこと？　あなただけでなく、そのあなたも。なぜ都霧様に嘘を吐くのですか」

金髪女子はどうやら話し続けていて、僕たちが席に着いたことに気付いていないようだった。それになぜか妹子ちゃんを指で差している。

それになぜ俺の呼び方が都霧様なんだよ。吐気がする。

「城ヶ崎浜三日月子さん、独壇は構いませんが、遅刻扱いになりませんよ」

先生が言うが、それは嘘だ。すぐに分かる嘘だ。それに、そんなことよりも猫の方は気にならないのだろうか。

だが、城ヶ崎浜三日月子と呼ばれた長い名前の女子は素直に席に戻っていった。その時、俺を見て顔を赤らめた気がしたが、気のせいだろう。三回も女子に顔を赤らめられて嫌ではなかったが、その理由が分からない内は早急に判断を下すべきではなく、また行動すべきではないだろう。

そう考え、そして今度は放課後どうするかを考えた。

第二話 三つ子

高校初のHRが始まった。ホムルーム
弱気先生の名前は福勢翡翠ふくせひすい、男性である。

この日のHRは配布物だけのようで、何種類かの書類を渡され記入すべき所を聞いて、学生手帳とそのカバーをもらい、最後にこれからの予定の書かれたプリントが配られてその説明を受けた。

その間、ずっと先生は抑揚の全く感じられない声で喋り続けていた。

三十分程でHRは終わり、放課後となった。明後日まで似たような日程だ。そこで週末になってしまい、授業は来週からのようだった。俺としては授業前までが勝負なので、今日も含めて5日間も授業が無いのはありがたかった。

俺は誰かと帰ろうと、目についたいかにも活発そうな短髪男子に声をかけた。

「一緒に帰らないかい？」

こつ問いかけると、その周りにいた彼の友達と思われる一人が言った。

「あ、入学式の東条都靄君、だったよね」

「ああ。よろしく」

出来る限りフランクにそう言うと、最初に声をかけた短髪男子が手を差し出してきた。

「俺は、に」

「あんだ、ちよつと付き合え」

俺が握手をしようとするとなぜかその腕は誰かによって横に反らされ、短髪男子の言葉を最後まで聞くことができずに引きずられていった。

俺の目に入ったのは、啞然とする短髪男子とその友達、そしてき

つい目をした城ヶ崎浜三日月子さんだった。

「姉が失礼しました」

どこかで聞いたような台詞を言うのは、今朝ぶつかった男子生徒の妹だ。

「あたしは別に何もしてねーよ。悪いのは妹子なんだが」

そうぶつきらぼうに言うのは、さっきまで俺の後ろの席に座っていた女子だ。

「ぼわ〜ん」

空を見上げて自らその効果音を発するのは、今朝ぶつかった男子生徒だ。

今俺は下校している。だがなぜこんな声が聞こえるかといえ、それは数分前に遡って説明しなければならぬ

こともないだろう。俺はただ単に後ろの席に座っていた女子に腕を掴まれたまま下駄箱まで連れてこられ、そこで待っていた今朝の二人も一緒に四人で下校することとなった。

それにしても、三人の容姿はよく似ていた。一人男子がいるが、その彼も似ている。

身長低め、スラッとした体に腰まで伸びる黒い髪。林檎のような丸い顔と白い肌。ただ違う所は胸の大きさだろうか。誰がどうとは言わない。

「自己紹介がまだでしたね。私は杉目昭すきのめ しょう。そして姉の杉目天すきのめ てんと兄の杉目明すきのめ あきです。よろしくお願いします」

「よろしくな」

「よろしくね」

三人兄弟らしいが性格がまるでばらばらだった。だがそんなことよりも一つ聞いておきたいことがあった。

「それで、三人はもしかして三つ子なのか？」

「当たり前だろ。こんだけ顔が似てりゃあ、ドッペルゲンガーでも

ない限りそうだろ。まあ二卵性だから明はたまたまだろうな」

男気たつぷりの天がそう答えた。大人っぽい昭は頷いている。よく分からない明はさつきからずつと空を見ていた。

本当に性格の全く異なる三つ子だ。よくこつも育ったものだ。親の顔が見てみたい。

「四つ子、かも」

明がぼつりと呟いた。

「なあ、家に来るか？」

天がそつぽを向きながら聞く。

「それがいいかもしれません」

昭が同意した。

このまま帰るよりも有益に思えたその提案に、俺は多少の好奇心を添えて答えた。

「行くよ」

なぜか陰でガツポーズをする天に言ってあげたかった。見えてる、と。だが言わなかった。というか言えなかった。彼女の横顔があまりにも嬉しそうだったからだ。

第三話 四つ子？

学校を出てから歩いて十分。一軒家の前にたどり着いた。

「ここが私たちの家です。まだ両親は帰ってきていないと思います
が、どうぞ」

そう昭が言っている間に、天と明は玄関の向こうに消えていた。
なんだか中で騒いでいる音が聞こえるが、このまま外にいるのも変
なので玄関に向かうこととする。

先回りした昭が開けてくれた。

「どうぞ」

「あり」

「ごめんなさい」

昭にお礼をして入ろうとすると、中にはか細い声で謝る女の子が
いた。その子を見て絶句する。

「寝てろって今朝言ったよな。晴はもつと自分の体を大切にしろ」

天がその晴と呼んだ女の子を優しく怒鳴っている。だがそんなこ
とよりも。

「なあ昭、あの子は？」

そう、晴の容姿が三人と非常によく似ているのだ。いや、同じと
言っても誰もが納得するだろう。ただ服は制服ではなくて黄色のパ
ジャマを着ていたが。

だが。

「昭って呼んでくれるの？」

昭は見間違いの返事をしてきた。ただ単に杉目が何人もいるから
名前と呼んだのだが、何かいけなかつただろうか。しかも顔が赤く
なっている。今朝もそうなつたかと思うが、どうしてこつても簡単に
顔が赤くなるのだろうか。

と、自分も見間違いのことを考えていたことに気付き、気持ちを
切り替える。

いつの間にか、晴と話していた天が俺の側に来ていて質問に答え
てくれた。

「晴はあたし達の妹だ。今年からあたし達と同じ高校に通うことにな
っているが。ま、詳しいことは中で話すから、まずは中に入んな」
一番話を通じるのは天のようだった。

リビングに通されると、天が晴を寝かせに二階へ、昭が飲み物を
準備しにキッチンに向かい、明と二人きりになった。とりあえず話
しかける。

「自己紹介をしていなかったな。俺は7組の東条都靄だ。よろしく、
明君」

「よろしくね、お兄……様？」

今、何て言った？

お兄様、って何でだよ。しかも様なんか付けて。城ヶ崎浜三日月
子の顔が浮かんで、すぐに消した。

簡単に質問する。

「何で俺がお兄様？」

自分でお兄様と言うのは意外と気力が必要だった。

明はさっきまでの寡黙さはどこえやら、饒舌に話し始めた。

「天と昭が好きな相手だから。いつか結婚すると兄弟になるけど。

天と昭のどっちが勝負に勝つか。そうなると昭は譲るから天が不戦
勝。だからお兄様。僕のお兄様。ちなみにファンクラブが設立され
ると。お兄様じゃあなくなるかも。それは残念。だからお兄様」

言葉の意味は分からなくもない。だが分かりたくない部分がい
つかあった。

俺が分析していると、天がやってきた。

「ごめんな、晴があたと話したいっつーから我慢させるのに手間
取った」

そう言いながら明の隣、つまり俺の斜め前に座る。ほとんど同時
に昭もやってきて、天の向かい側、つまり俺の隣に座った。そして

緑茶の入ったカップを配った。

熱いお茶を一口飲んで一息つき、天を見ながら聞く。

「それで、あの子は」

「すみません、紹介が遅くなってしまつて。杉目晴すぎのめはる、私たちの妹ですが、同学年です」

問いかけた天は熱いお茶を冷ますことに精一杯のようで、昭が答えた。その昭を見ると、どこか意地の悪そうな顔をして続けた。

「四つ子ではありませんよ。顔が似ていても、晴の誕生日は私たちよりも一日前なんですから」

今ので全てが分かった。昭が意地の悪そうな顔をしたのは、俺が分かっていないと思つたからだろう。だがもう少し巧妙にヒントは出すべきだ。

第四話 ファンクラブ

晴は昔から体が弱かったらしい。一度体調を崩すと中々元気にはならないで、徐々に悪化することもしばしばだそうだ。

その原因は頑張りすぎにあった。家に誰もいないからと病弱にもかかわらず家事をして、更に悪化する。そんな悪循環が続いてしまうそうだ。今はそんな悪循環の真っ只中で、学校に登校できるようになるまでしばらくかかるようだ。

「所で明、ファンクラブって何だ？」

実は今までの会話で一番聞きたかったことだ。

空になったはずのカップを口に付けた明は、一口飲んでから答えた。

「城ヶ崎浜三日月子の会長を中心とする東条都靄。向ヶ丘雉唯の会長を中心とする桜岡桜。麻木椎奈の会長を中心とする斉藤尊。円谷瞳の会長を中心とする峰岸聲馨。伊藤静の会長を中心とする杉目兄弟。以上五人それぞれのファンクラブがある。という噂」

その答えに対して、なぜか昭は反論した。

「明、そうじゃないよ。都靄君はファンクラブって何だって聞いたんだから、ファンクラブはその人のファンが集まった学校非公認の集団です、って言えばいいんだよ。そうですね、都靄君」

昭は見当違いがお得意のようだ。

「あのな昭、誰だってファンクラブがどんなのかなんて知ってるぞ。問題にしてるのは、あれだ。あの五つで四文字の」

「5 W 1 H」

「そう、5 W 1 Hだ。って晴、いつの間にか起きたんだ」

リビングの入り口にパジャマ姿の晴がいた。天と昭は立ち上がって晴の所に向かい、またもや明と二人きりになった。

「今日は明と二人きりになることが多いな」

「する？」

……なにをですか、明。なにをするのですか。

「せつ」

「ストップブリー！ それ以上言うとは色々とおの方で問題があるんだ！」

なんとか止められてよかった。っていうか、上って何だ？

「せつくす」

……………

今、何と。セツク

「都靄、明の言うせつくすっていうもんは、正確な付け足しをする、っていうことだかな。もしかして、違うこと考えてたか？」

助かった。危うく言って、否、思ってしまう所だった。

「凶星か。そうなんだろ、さっさと言っちゃえよ」

慌てていると昭が助け舟を出してくれた。

「天、都靄君が困ってるでしょ。一旦喋るのを止めないと都靄君の意見が聞けないよ」

「ああそうか、ごめんな。それじゃ、聞くとするか」

「はい」

舟はどこか遠くへ行ってしまったようだ。

天と昭がじつと見つめてくる。同じ美顔に見詰められて緊張したが、明がポカ〜ンとか言っているのを見て大分落ち着いた。

「あのさ、何か誤解しそうになっているようだけど」

「話を終わらせた方がいいと思う」

俺の言葉に続けたのは晴だった。

「もう夕方だよ。お兄ちゃんもお姉ちゃん達も昼食も食べないで東条さんを止めおいて」

まるでその姿から、ぶんぶんという効果音が聞こえてきそうだ。

そう言えば昼食がまだだったんだな。いくつか気になることはあるが今日はこれで失礼しよう。

「俺、もう帰るぞ」

「おう、また明日な」

「どうも失礼しました」

「さようなら」

「玄関まで送ります」

上から、俺、天、昭、明、晴だ。

俺は晴と一緒に玄関に向かい、靴を履いた。

「今日は来ていただき、ありがとうございます」

「いや、こっちも興味はあったので」

「そうですか。では、まだ興味がありましたら、どうぞいつでもお越しください」

「そうさせてもらうよ。所で、晴の誕生日は4月1日であってるかな？」

「えっ、どうして私の誕生日を？」

「いや、ちょっと昭に聞いてね。まあ、合っていればそれでいいんだけど。体を大切にね」

「あ、ありがとうございます」

「それじゃ」

「はい、また」

晴に手を振りながら俺は杉目家を後にした。最後にチラリと見えた晴の紅潮した顔を疑問に思いながら。

第五話 生徒プロフィール1

俺の家は……別にいいか、説明しないで。敢えて言うのならば、でかい。それだけだ。ちなみに、独り暮らし。

自分の部屋で一息吐き、遅い昼食と早い夕食を食べるためにキッチンに向かった。

冷蔵庫の中を見ると、たまねぎ人参じゃがいも肉りんご冷蔵御飯があった。これから創造できるといえば、カレーだな。

調味料などの入った棚を開けた。後はカレールーっと。カレールー。カレールー、カレールーカレールーカレールーカレールー……

……
ない。

仕方がないのでスープにした。

食べ終わった頃にはもう日が暮れていた。カレーを作るつもりでいたので、スープを多目に作ってしまった。そしていざよそる段になると、つい、本当につい、多くよそってしまった。なので食べきるのに随分と時間がかかってしまったのだ。今日会った美少女たちを思い出していた訳では、断じてない。もう一度言うが、断じて、無い。

自室に戻り、コンピュータを立ち上げる。その中から『学校征服計画』と書かれたフォルダを開き、『生徒プロフィール』と書かれたファイルをダブルクリックした。

そこには俺が努力して手に入れた全校生徒の名簿が入っている。

これからほぼ毎日このファイルを更新することになるだろう。

すぎのめ そら

杉目天。1年7組、出席番号14番。ちなみに俺は22番だ。四

兄弟の一番上で、性格は男っぽい。容姿は小柄な体躯と顔、そして長い黒髪が特徴的で、喋らなければ充分に美少女。聡明で明るく、

しつかり者のお姉さんと言った所だろう。

杉目明すぎのめあきは四兄弟で唯一の男子。1年。容姿は姉の天と同じだが、よく見ると天よりも胸が大きいようだ。性格は不明だが、意外と観察力がある。だが俺をお兄様とは呼ばないでくれ。

杉目昭すぎのめしやう。四兄弟の三人目で、まとめ役のようだが勘違いをして話に変な方向に向かいそうである。天、明と合わせての三つ子で、天とは一卵性の姉妹らしい。1年。誕生日は1993年4月2日で、天と明も同じ日。容姿は天と同じだが、胸は兄弟の中で一番大きいようだ。

杉目晴すぎのめはる。同じく1年。四兄弟の一番下。体が弱く病気がちだが、責任感が強い。入学式には出なかつたようだ。四兄弟の中では一番普通の女の子らしい。黄色のパジャマを着ていた。誕生日は天たちよりも一年遅い1994年4月1日の早生まれで、俺たちと同学年だ。容姿は上記三人とほぼ同じ。聞き役で内向的か。

瀬賀井妹子せがいいもこ、1年7組、出席番号16番。杉目天の友達のように友達が多そう。性格はフレンドリーで、外向的。髪は少し癖のついた茶髪のセミロング。

城ヶ崎じょうがき浜三日はまみかひ月子つき、同じく1年7組、出席番号は13番。胸の辺りまで伸びる金髪が象徴的。性格はツン。デレは未確認。俺、こと東条都靄あずまファンクラブ会長を務めているらしい。明と同じように、都靄様、と様付けで呼ぶのは止めてほしい。

桜岡さくらおか桜さくら、3年生。昨年度の文化祭におけるミス 高校コンテストで見事一位に輝いた美女。

向ヶ丘むこうがおか雉かぢ唯い、3年生。桜岡桜ファンクラブ会長。

斉藤さいとう尊みづみ、2年生。現生徒会副会長。次期生徒会長候補。

麻木あまの椎いし奈な、2年生。斉藤尊ファンクラブ会長。

峰岸みねがし馨しん、2年生。男。

円谷ひたひ瞳ひとみ、2年生。峰岸馨ファンクラブ会長。

伊藤いとう静しずか、1年生。杉目四兄弟ファンクラブ会長。

福勢ふくせ翡翠ひすい、1年7組担任。男。黒くて長い前髪が雰囲気暗くし

ている。単調な口調が特徴。担当教科は英語。ちなみに今朝の席順は適当に決めたようで、投げ遣りな部分がありそうだ。

なんだか胸の大きさが何かの基準になっていた部分があった気もしたが、気にしないことにする。

今日はこれ位でもう寝て、明日は早く学校に行くことにした。

第五話 生徒プロフィール1（後書き）

これから人がどんどん出てくると思いますので、時々こうしてまとめたいと思います。

小説中にて分かり難い部分がありましたら教えていただけるとありがたいです。もちろん、感想等もとても蟻が鯛です。

これからも本作を楽しめるよう、精進してまいります。

第六話 新聞部

二日目。

朝の早い時間に家を出た俺は、学校に大分早く着いた。それでも既に野球部は練習していたが。

教室に入ると一人の女子が寝ていた。入学式の例の子だ。黒板に書き残された席の図とそこに書かれた出席番号を見比べると、彼女はどつやら36番、つまり一番最後のようだ。

よく見ると黒板の端に、われきせきのこ、と書いてあった。我、奇跡の子？ 誰が書いたのだろうか。

「おはよう」

とりあえず寝ている女子に朝の挨拶をしたが、案の定返事はなかった。ただ虚しく俺の声だけが響いた。

鞆を自分の机に置き、まずは学校を見て廻ることにした。

ここ 高校は、大きく分けて六つの建物からなっている。まずはHR棟。一階が3年、二階が2年、三階が1年となっていて、全ての教室が収まっている。予備教室が一階と二階にそれぞれ一つずつ、更に情報室が三階にある。四階には、生物室、地学室、被服室とそれぞれの準備室、五階には視聴覚室、図書室、音楽室、演劇部室がある。

これの南側に平行に建つ建物が管理棟。職員室や生徒会室などがある。これとHR棟は二本の連絡通路で繋がっており、その東側には昇降口、間には中庭、西側には一階が食堂で二階が合宿用の部屋になっている建物がある。

HR棟の北側には体育館があり、その東側には武道棟、さらにその東側には部室棟がある。部室棟の更に奥には弓道場がある。

グラウンドは二つ。主に野球部の使う第一グラウンドは管理棟と弓道場を結んだ線が対角線となるような長方形である。主にサッカー

一部が使う第二グラウンドは体育館の更に北側にある。大きさは第一グラウンドよりも第二グラウンドの方が大きい。

教室を出た俺は、連絡通路を通って管理棟に向かっていた。

だが、そこには二年生の白髪の女子がいた。確か、彼女は。

「新聞部の、青梅慰夢さん？」

すると彼女はこっちを見、首を僅かに傾けた。肩にかかる程度の髪が揺れる。

「はいです。東条都靄君ですねです」

「そうだが」

そう言つと、青梅はトテトテと近付いてきた。意外と背が低い。

「あの、『オトシモノ』について、知ってるんです？」

『オトシモノ』か。いきなり本題になつたな。つまり。

「正確なことは知らないが、この世では本来起こることの無い現象の総称、だつたか」

「東条影偶致さんからかな、です」

東条影偶致は俺の父だ。

「ああ。だが、未だに信じられないんだが」

青梅は微笑む。

「この学校にも何人か『オトシモノ』を持った人がいます。学校を本気で征服するのなら、気を付けて下さいです」

「何で、そのことを」

「新聞部を甘く見てはいけません。あ、新聞部はそのことには無関知なのです。また、です」

そう言い残して、青梅はHR棟へトテトテと歩いていった。

学校征服計画はいつの間にかバレたのだろうか。それにわざわざそんなことを言いにきた理由は何だ。

まあ兎に角、新聞部が関知しないでいてくれることはありがたかった。

高校新聞部の発行する新聞は学内はもとより学外からも人気

があり、異常に大きい影響力を持つ。実の所この活動は隠れ蓑らしいのだが、この計画には関係無いので詮索はしない。

俺の計画に予想外の影響を与えかねない新聞部だったが、これで大分安心できた。

一通り校舎内を見て廻り教室に戻ると、寝ていた女子はまだ寝ていた。

時刻は8時を少し過ぎた辺り。他に生徒がいなかったので、俺はその女子にもう一度話しかけることにした。

「おはようっ！」

さつきよりも元気に言ってみたが、さつきよりも更に自分の声が響いてただ虚しさが大きくなるだけだった。

「ZZZZ・・・」

第七話 苦手なこと

今日のHRは自己紹介から始まった。

それが終わると、委員会と係を決める。俺は学級委員になった。もう一人の学級委員は^{はいしまよしの}拝島好乃だ。

あっさり決まった俺たちを中心に、他のものについても順次決めていった。ちなみに寝ている女子、^{われき}割木夕子は依然として寝ていて参加していなかったので、最後まで残った図書委員にした。

それらが終わると明日の教科書販売や身体測定についての説明があり、放課後となった。

そういえば、割木はずつと寝ている気がする。というか起きている姿を見たことがなかった。俺が朝早く来た時も既に自分の席で寝ていたし、今も寝ている。確か人間には寝ることのできる限界の間があるそうだが、そうなる^と彼女は夜に活動しているのだろうか。一瞬、ドラキュラが思い浮かんだが、すぐにその考えを振り払った。いくらなんでもそれは無いだろう。

朝作ったおにぎりを食べながら教室を眺める。そこには大体五つ程の中規模グループができていた。一番目立つのは城ヶ崎浜のグループ。お嬢様とその侍女といった感じだ。一番無視できるグループだろう。次が妹子ちゃんのグループ。明るく遊び好きの男女の集まりか。杉目天はここだ。ここも然程問題にはならないだろう。三つ目は昨日話しそびれた活発そうな短髪男子の^{にしゅう}西翔を中心としたグループ。妹子ちゃんのグループと仲が良さそうだが、こちらは運動好きに見える。四つ目が、話の内容から推測するにオタクのグループだろう。最後のグループは^{はしまよしの}拝島を中心とする女子の集まりか。この二つのグループが厄介かもしれない。それにグループに参加していない人も何人かいるようだった。

とまあ今の状況を考えたが、一概にこの五つのグループに分けられることは無いだろう。

最後のおにぎりを食べ終わると、それを待っていたかのように声をかけられた。

「都囂、来い」

気を抜いていた俺はあつという間に天に持っていた包み紙ごと手を掴まれ、無理矢理席を立たされて引きずられた。

足に机や椅子が当たり痛かったが5メートル程で止まった。

掴まれている手を振りほどき、スラックスに付いた汚れを払いながら立ち上がる。そこに。

「え〜〜!!!」

悲鳴、あるいは黄色い歓声、あるいは金切り声が聞こえてきた。

そして反射的にしゃがみこんでしまった。

また失態をしてしまい、心臓が高鳴り、冷や汗が出てきた。しかも今度は目の前でだ。印象の悪化は免れないだろう。こういう時は気持ちを切り替えて、明るい笑顔で立ち上がるのだ。そうすれば何とか誤魔化せる。

そう思って立ち上が

@* \$*#% £ ¢ + x! 〒>

言葉では言い表したくない音が聞こえてきた。音のした方を見ると、天が黒板に爪を立てて微笑んでいる。その姿を見ただけで音は聞こえないにも拘らず嫌な気分になる。

他にも半分ほどの生徒が耳を塞いでいるのを見て、俺は立ち上がった。学級委員として。

「おい天、な」

「杉目天さん、何ていう音を出しているのですか。皆さんが迷惑しているのですよ」

目の端に拝島も立ち上がったのが見えたが、城ヶ崎浜が盛大に声を発したことで俺と拝島は動きが止まる。

それに対する天は首を一つ傾げると、両耳から何かを取り出した。そして言う。

「何だ」

城ヶ崎浜は僅かに苦い顔をしたようだが、すぐにいつもの挑戦的な顔に戻る。

「もう一度言いますわ。杉目天さん、皆さんに迷惑になる音を故意に出さないで頂けますこと」

「ああ、そのことなら大丈夫だ。だがあんたも見たる、都靄のあの反応」

天に問い掛けられ首を傾げた城ヶ崎浜だったが、しばらくすると納得したのか頷いて言う。

「あんた、と呼ばれる筋合いは杉目天さんには一切ありませんが。ですがまあ、そのことには感謝致しますわ」

あれ、何で和解するんだ？ しかも何で俺が関係する？

「都靄は知らなくていいぞ」

「そうですね。都靄様は普段通りになさって下さい」

いつの間にか自分の考えていることを口に出してしまったようだ。

だが……何でだ？

第八話 喧騒

いつの間にか、俺は女子たちの食事中の会話に参加させられていた。

「ねえねえ、天の家に泊まったって本当！」

なぜ疑問形ではないんだ。

とまあさつきから周りの女子は俺の話題で盛り上がっている。ていうかよくそんなにネタがあるものだ。しかも天と妹子ちゃんと城ヶ崎浜が仲良くなっているし。

「泊まってるない」

とは言うものの、全く聞いていないし。

どうやら先ほどの悲鳴は、俺が天の家に行つたと聞いたことに起因するものらしい。そしてどうやら俺がうずくまる姿が可愛いらしく、天が続けて黒板を引つ掻いたそう。迷惑だ。

だが、何で天は僕が黒板を引つ掻く音が嫌いですぐにうずくまってしまうことに気付いたのだろうか。もしかしたら入学式の時に気付いたのかもしれない。

女子たちの終わらぬ会話に頭がくらくらしてきた。

「都囂様、一度私の家においで下さい」

「ああ、いいよ」

誰かが何かを聞いてきたので、適当に答えた。

「本当ですか？」

「ああ、いいよ」

誰かが何かを聞いてきたので、適当に答えた。

「では今日にでも」

「ああ、いいよ」

誰かが何かを聞いてきたので、適当に答えた。

「では今すぐ参りましょう」

「ああ、いいよ」

誰かが何かを聞いてきたので、適当に答えた。

「では皆さん、準備を」

「ああ、いいよ」

誰かが何かを言ったので、適当に答えた。

「都囂様はしばらくお待ちください」

「ああ、いいよ」

誰かが何かを聞いてきたので、適当に答えた。

喧騒が離れていった。

で。

「ここはどこだ？」

「私の自宅ですわ」

簡潔な説明をありがとう。だが、この邸宅は簡潔には語れない。

先程、入り口にあたる鉄門が閉まる盛大な音がしたが、それは些細なことではない。

鉄門から正面に見える大豪邸まで200メートルはあるうか。人間がいくら頑張っても20秒はかかる距離もあるそこを、俺たちはリムジンに乗って進む。

学校を出てからはや10分、なかば無理矢理連れてこられた俺は窓から体乗り出していた。

反対側はさすがに見えないがシンメトリーになっているであろうその庭にはカラフルな花が一面に咲き誇り、所々には有名な彫刻を模した樹木がアクセントとして植えられ、遠くの小さな、それでも三階まではあるであろう中世風の建物を見ればここが本当に日本かどうか疑ってしまう。

リムジンの進む先を見ると池が道を遮るように横たわり、その中央には高々と水を噴き上げる噴水があった。その周りを時計周りに半周した所でリムジンは横向きに止まった。まだここから大豪邸まで50メートル程あつたはずだが。

リムジンの扉が外側から開き、外に出た。

一番最後に出た俺は、そこで見た光景に耳を、目を、頭を疑った。
「…………おかえりなさいませ、三日月子お嬢様。いらっしやいませ、同学の皆様」…………

丁度、俺が見ていたのが左側だったためか気付かなかった。リムジンの止まった所から大豪邸の前までの道の左右に、これでもかという程の黒服に白エプロンの、しかも美形の、何て言ったか。

「メイド？」

天の呟きに納得した。

そう、彼女たちはメイドという職業だろう。メイドが沢山並んでいた。だがこんなに必要なのだろうか。

俺と天と妹子ちゃんは固まっていたが、城ヶ崎浜は勿論のこと他の子たちも一切気にすることなく進んでいく。

俺が現実逃避をしている所に声がかかった。

「皆様も、どうぞ此方へ」

少し皺枯れた、だがどこか深みのあるその声の主を見ると、リムジンを運転していた男性だった。丁度、リムジンの扉を閉め終わった所のようにだ。

その運転手の優しい笑顔を見て少しだけ緊張のほぐれた俺たちは、その白手袋の示す方に向かって歩き始めた。

第九話 大豪邸

やはり途中で止まってしまい、結局は運転手にゆっくりと先導されながらやつとのことで大豪邸に到着した。その間メイドたちは微動だにしなかった。脅威的驚異かもしれない。

身長の二倍はあろうかという木製の扉がゆっくりと開かれ、大豪邸内部が露わになった。そして中に一步入る。

まず目についたのは正面の大きな階段。丁字のそれは赤い絨毯が一面に敷かれている。手摺は濃い茶色をした木できており、その付け根は白い大理石のようだ。階段の奥にもまだ空間が続いている。視線を下に向けると一面の赤い絨毯。今足が置かれている部分も絨毯になっていて、毛足が長くモフモフしているのが分かる。上を見ると大きなシャンデリアが階段の手前のフロア上の一つ、階段の上の一つ、その更に奥の一つあった。一見蠟燭に火が灯っているような気がしたが、炎が揺れていないところを見ると電氣的なものなのだろう。左右の幅は50メートルをゆうに超え、今見える空間だけでも余裕で千人は収容できる広さがありそうだ。壁はベージュ色でよく見ると細かい装飾が至る所に彫られているようだ。各部屋へと繋がるであろう高さ2メートルほどの扉を挟むように等間隔に壁から半分程だけ飛び出して配置された柱には、古代ギリシャのパルテノン神殿を思わせる縦の筋が入り、その上には間接照明が施されているように仄かに明るくなっている。

さっきの庭とここを見ただけでも、あれだけのメイドが必要な理由がよく分かった。

ちなみに、俺の家は広いだけで手入れはしていない。

城ヶ崎浜はフロア左手の手前から二番目の扉を開けさせ、俺たちに入るよう促していた。

俺たちがそれに気付くと彼女は中に入ってしまい、メイドの一人

がその扉を開けたままにしていた。特にそれについて思うことはなく、だがどこかそわそわしている妹子ちゃんや天は彼女に対して申し訳ないとも思っているのだろうか。人には人に課せられた役割があるというのに。

そんなことを考えながらその部屋に入った。

そこはいくつもの円卓が並べられた部屋、つまりパーティー会場といったところだった。そこで城ヶ崎浜とその侍女のような女子たちが円を作っている。

何気なく近づいてきたウェイターから一つグラスをもらい、俺も輪の中に入る。ワトアワトアしている妹子ちゃんと天はそのウェイターに手引きしてもらってやっと輪の中に入った。

ウェイターに手を握られたことによつて顔が赤くなった二人が輪の中に入ると、城ヶ崎浜が高々と宣言した。

「では、ここに『東条都霏公認東条都霏公式ファンクラブ』を設立させていただきます。乾杯」

「……」乾杯！「……」

……ちよつとまで。

「ちよつとまでーい」

……あ、つい、本当につい、声が訛った。

キョトンとする皆。目が点になってます。今度こそ、失敗して、嫌われてしまっ

「……」キヤー！！！！「……」

「?????」

なぜそこでキヤーなんだ。しかも真っ赤になった顔に手を当てて体をクネクネさせている。どこぞの宗教集団か、ここは。

「……」カワイー「……」

……かわいい。漢字では愛^めでることが可能である、つまり可愛いと書くがこれは当て字である。古くは小さい対象に対して使われた形容詞。現在のようにな大人などに対して使われることはなかった。いつの間にか語義が変わっていった単語の一つ。

いやいやいや現実逃避していたら話が分からなくなる。とりあえず、今の状況を説明しよう。カワイイーと言った城ヶ崎浜一同が、妹子ちゃんや天も含み、俺を取り囲んで寒くもないのにおしくらまんじゅうだ。わー、暖かーい。てゆーか熱ーい。

いやいやいや現実逃避していたら話が分からなくなる。ちゃんと話を先に進めよう。

ということ、俺は吠えた。

「ヤメローー！！！」

エクスクラメーションマークが二つしか付かなかったのは残念だ。

第十話 設立パーティー

俺の声にビクリと体を震わせる一同。

しばらく沈黙が続いたが、それを破る声が部屋に響いた。

「どういたしました」

声のしたほうを見ると、先程の運転手が扉から顔を出していた。走って駆け付けたのか息を切らせていたが、喋る言葉には一切そんなことを感じさせなかった。

「何でもございませぬ、溝部みぞべ。それより、パーティーの準備を」

「はっ、かしこまりました」

俺に抱きついていている城ヶ崎浜は溝部という運転手にそう命令すると、俺を上目遣いで見てきた。

「だめ？」

……あー、城ヶ崎浜はツンデレだったか。今、デレが確認できた。もちろん答えはいつも一つ。

「駄目。俺が思うように動けない」

城ヶ崎浜は溜息を一つつくと、俺から一步離れて手を叩いた。

「はい皆さん、充電はここまでにして、ファンクラブ創立パーティーをいたしましょう」

「……………はい！」「……………」

そう元気よく言う一同を見て、俺は内心で溜息をつくのだった。

パーティーは、それはそれは豪勢なものだった。どうも制服姿の高校生には合わないのか、どことなく違和感が出てしまっている。だがそんなことを気にする時間を俺にくれる人はいなかった。

入れ替わり立ち替わり話しかけてくる女子たち。一人当たり十分ほど、七人いたので一時間以上話していたことになる。その間、さつき昼食を食べたばかりだというのにテーブルに出されたお菓子をどんどんと持ってこられ、それを食べないとなぜか睨まれるから大

変だった。

そんな時間もようやくおひらき。ようやくだ。

俺が椅子で休んでいるうちにほとんどの人は帰ってしまったようだ。残ったのもちろん城ヶ崎浜だが、天も残っていた。そんな時、扉がノックもされずに開けられ、そこから三人の美女が姿を現した。一人だけ灰色の作業着だったが、それでも美しかった。

どこかで見たことがあるなと思っていると、三人が自己紹介をしてきた。

最初に長髪の人。

「はじめまして、東条都靄君、ですね。私、田奈浜弥羅和たなはま やらわと申します。これから色々とお世話になることもあるかと思いますが、その時はよろしくお願いしますね」

次に短髪の人。

「はじめまして、東条都靄君。私、知ってるかもしれないけれど、田奈浜赤沙たなはま あかさ、役者業をやっています。弥羅和とは双子の、妹です。よろしくお願いします」

最後に作業服の人。

「はじめまして。私は仲村小詠なかむら こよみです。えっと、高校の二年生で田奈浜さんとは同窓生になるのかな」

田奈浜赤沙。数年前に新進気鋭の役者としてデビューし、今では国民的アイドルになっている。父親はあの株式会社株の社長をしている。仲村小詠。去年のミス 高校コンテストで一年生にして見事2位に輝いた美女だ。今は同じ二年生の狭山茂樹ひさやま しげきと公認で付き合っているようだ。最近破局説が浮上しているようだ。彼女の様子を見る限り、そんな風には見えないのだが。

挨拶だけすると三人は残っているお菓子に向かい、それらを食べ始めた。よほどお腹が空いていたのだろう。

それを見て、俺は家に帰ることにした。城ヶ崎浜が送ろうとしてくれたがそれを遠慮して徒歩で家まで帰ることにした。天はもう少しここに残るそうだ。

玄関近くまで行くと城ヶ崎浜がやってきた。向かい合つ形に立つと、彼女が顔を赤くして言う。

「また……また、来て頂けますか？」

いつもそんな感じでいれば可愛いのに。

そう思いながら返答する。

「ああ、忙しくなければいつでもいいよ」

「で、では、明日にでも」

「あー、明日はまた別の家に行こうと思ってるんだ」

「そう、ですか。仕方ありませんわ、都霏様には都霏様の予定があたりでしょうし。ではまた明日学校で」

「ああ、また明日」

少し悲しそうな顔をする城ヶ崎浜を見てほくそ笑みながら、帰宅の途についた。

第十一話 生徒プロフィール2

どのくらい歩いただろう。もう既に日は落ち、明るい月が天上から世界を照らしていた。

やっとのこと家に着いた時には夜の6時40分だった。

夕食の時間には少しだけ早いため、俺は自室に行きコンピュータを立ち上げた。

昨日と同様に『生徒プロフィール』を開く。そこに今日得た情報を追加した。

1年7組一覧。

- 出席番号1番、安西美香華、女。
出席番号2番、石嶋純平、男。
出席番号3番、岩井琴子、女。
出席番号4番、江ヶ崎萌、男。
出席番号5番、貝川正、男。
出席番号6番、叶鼎、女。
出席番号7番、神崎天使、女。
出席番号8番、雲英政樹、男。
出席番号9番、京栄恭、男。
出席番号10番、鴻巣一、男。
出席番号11番、古賀虎駕、男。
出席番号12番、古森山桜、女。
出席番号13番、城ヶ崎浜三日月子、女。
出席番号14番、杉目天、女。
出席番号15番、鈴木小五郎、男。
出席番号16番、瀬賀井妹子、女。
出席番号17番、洗足長助、男。
出席番号18番、泉南泉、女。

出席番号19番、千田万鶴ちただよるすず、女。
出席番号20番、土兄拓郎つちのえたくろう、男。
出席番号21番、土居久子とよこひさこ、女。
出席番号22番、俺。
出席番号23番、七瀬せなななせ、女。
出席番号24番、西翔にしゅう、男。
出席番号25番、沼津晴男ぬまつはるお、男。
出席番号26番、根岸学ねぎしまなぶ、男。
出席番号27番、拜島好乃はいじまよしの、女。
出席番号28番、日荒川翠ひあらかわみどり、女。
出席番号29番、響薫ひびきかおる、男。
出席番号30番、日比野萌ひびのもえ、女。
出席番号31番、片加最へんかさい、男。
出席番号32番、母衣具ラムほろつく、女。
出席番号33番、望月朔もちつきさく、男。
出席番号34番、夕張慧霞ゆうはりすいか、男。
出席番号35番、夢星宇宙ゆめほしそら、女。
出席番号36番、割木夕子われきせきのこ、女。

以上。

安西美香華。東条都靄ファンクラブ会員。

神崎天使。東条都靄ファンクラブ会員。

土居久子。東条都靄ファンクラブ会員。

七瀬せな。東条都靄ファンクラブ会員。

日荒川翠。東条都靄ファンクラブ会員。

日比野萌。東条都靄ファンクラブ会員。

割木夕子。いつも寝ている不思議な子。見た目にそぐわず、いび

きは煩い。

青梅慰夢あおむめいむ、二年生。新聞部員。白髪で語尾に、です、を必ず付けるのが特徴。身長は低め。二年生の天才三人組の一人。計画には関知しないでもらえるようだ。

田奈浜弥羅和、二年生。赤沙の双子の姉。確か、吹奏楽部員だっ
たはずだ。

田奈浜赤沙、役者。弥羅和の双子の妹。高校の直接の関係者

ではないが、ここに記した。田奈浜姉妹は株式会社社長田奈

浜吾朗の娘で、現在、どういう経緯でか城ヶ崎浜と同居している。

仲村小詠、二年生。昨年度のミス。高校コンテストで一年生に

して2位となる美人。狭山茂樹の恋人のようだ。城ヶ崎浜の豪邸に

いた理由は不明。

狭山茂樹、二年生。仲村小詠の恋人。

目がシヨボシヨボしてきた。今日はこれくらいにしよう。

俺は夕食をとり、明日も早く学校に向かおうと早めに布団に入っ
た。

第十二話 お弁当

三日目。

朝教室に着くと、昨日と同じように割木が眠っていた。HR前は比較的穏やかに過ぎていく。

今日のHRは先輩が学校を案内したり、部活動を見てまわる。数多くの部活や同好会が存在するため、午前のみでは半分も回りきらなかつたらしい。

配布されたプリントに全部活動一覧が載っていたが、特に興味深いのは『なにもしない部』だ。一体何をするのだろうか。まあそついった事は後で考えるとしよう。

放課後になり家で作ってきた弁当を開けようとすると、おずおずといった感じで黄色のハンカチに包まれた物体が差し出さる。

顔を上げるとそこにいたのは岩井琴子いわいことこだった。

「あ、あの、お弁当、どうぞ」
顔を赤らめながら言う彼女の後ろでは、拝島やその他数人が見守っている。

印象を悪くする必要も、昼食を減らす必要もないので、素直に受け取ることにした。

「ありがとう」

俺が受け取ると、岩井は顔を俯かせながら拝島たちの所に戻っていった。目の端に城ヶ崎浜がこちらを睨んでいた気もしたが、まあ気にしないことにしよう。

ハンカチを解き蓋を開ける。白米に乗った赤い梅干し、お馴染みの黄色い玉子焼き、キャベツの千切りに乗った小さな唐揚げにプチトマト、ヒジキと豆の煮物。それらが機能的に詰められた色彩豊かな弁当は見るからに美味しそうだ。

まずは定番の玉子焼きから食べようと箸を

「都霏様、私のお、お……」

取るうとする、城ヶ崎浜がさっきまで食べていた弁当を持って話しかけてきた。

「お弁当がどうしたんだ？」

なかなか続きを言わないので言ってみると、城ヶ崎浜はその弁当箱を置いて自分の席に戻ってしまった。残りを食べてもいいのだからか。

机の上に乗った三つの弁当箱を見つめていると後ろから声がかかった。

「都霏君、大変だね」

振り返ると妹子ちゃんが弁当箱を眺めている。

「岩井さんと三日月子ちゃんの二人からお弁当なんてもらって」

「まあ、腹の足しと家計には助かるから、大丈夫だ」

彼女は少し考える風になると言った。

「あの二人、結構人気あるのよね。天も都霏君のこと気になってるみたいだし。ねえ、誰選ぶの？」

グツと顔を近づけてきた彼女の問の意味がいまいち分からなかった、そこはスルーして別のことを言うことにした。

「妹子ちゃん、顔が近いよ」

好感度を上げるため最後に笑顔を付け加えた。

すると妹子ちゃんは唐突に顔をそむけ、机や椅子のぶつかる大きな音を出しながら床に倒れこんだ。

思考が追い付いていないのか体がすぐに動かない。保健委員の夢星宇宙めほしそそが駆け寄ってきて彼女の容態を調べ始めた時になってやっと動き出した。

近寄ると、夢星はそつと彼女を横たえ俺を見て一言。

「笑顔禁止」

そう言った。そしてもう一人の保健委員、貝川正かいかわただしと共に彼女を保健室に連れていった。

「びつくりしたよー」

俺が三つの弁当を食べ終え保健室に行くと、元気になった妹子ちゃんがそう言いながら出てきた。

「大丈夫？」

「うん。平気」

「そう」

俺はそれを聞いて踵を返そうとしたが、妹子ちゃんに呼び止められた。

「あの、さ」

「何？」

「あの、えっと、私の家、来る？」

真意を問おうと口を開きかけると、彼女が慌てたように付け加える。

「あのあの、別に都霧君が好きとかそういう訳じゃなくてね、ただ今日のお礼をしたいの、そうそう、お礼よ。お礼なんだから天とかとは関係ないんだから」

お礼をされる筋合いは無いはずだが、とは口に出すことはなく俺は同意した。

「いいぞ」

そして三日目の今日は妹子ちゃんと帰ることとなった。

第十三話 宇宙儀

瀬賀井妹子に手を引かれ（そう手を繋いでいたのだ）、電車に乗り（そうお金を使われたのだ）、自転車で数分（そう走らされたのだ）、着いた所は一般的な二階建ての一軒家だった。

俺が疲れていることになぜか気付いてくれない妹子ちゃん。こっちを見ることなくさっさと家の中に入って行ってしまった。

家の外で待たされること十数分。一人の女性が話しかけてきた。30代前半に見える。

「あなた、どちら様かしら」

少し棘のある口調で話すが、そこを気にすることはない。こういった人にはそれなりの対応が求められる。

「あ、初めまして。僕は瀬賀井妹子さんと同じクラスの 高校一年、東条都靄と言います。今日は瀬賀井さんにお呼ばれに上がったのですが。あなたは瀬賀井さんの」

母親だろうと当たりをつけて聞いてみた。

「あら、御学友の方でしたか。私、妹子の父でございます。どうぞお見知りおきを」

何だか予想外の出来事が多発している。一昨日の杉目のことといい、昨日のファンクラブのことといい、そして目の前の妹子ちゃんの母親、否父親のことといい。

その母親、否父親が俺の顔を覗きみていた。つい、飛び退いた。慌てていたとはいえ、よく考えてみれば失礼なことをしてしまっただ。なので謝る。

「すみません」

だが妹子ちゃんの母親、否父親は笑みを崩さずにこう言った。「構いませんよ。私、人をからかうのが趣味なので」

その妹子ちゃんの親（性別は怖くて確認していない）に連れられ

俺は中に上がった。

リビングに通され、妹子を呼びにいく、と親は言いおいて二階に行った。一人残され、することもないので部屋を見渡した。

薄型の液晶テレビの側に観葉植物、反対側の小さな棚には新聞や雑誌が入り、上には赤べこと掌大の将棋の駒、その上の壁にはアイスクリームの写真が全体の半分を占めているカレンダーが三月のままになっている。

キッチンとリビングの境目にあるカウンターはすでに物置と化していた。広告が積み重なり、その間を縫うようにルービックキューブや木彫の熊、ミニチュアの凱旋門、小さなサボテン、さらには太陽系の惑星の動きが再現できる装置、確か名前は宇宙儀だったか。そんな物まであった。

「気に入ってくれた？」

雑多な物に目を奪われ、つついここが他人の家だということを忘れてしまっていた。

妹子ちゃんの親はさっきまで俺が見ていた宇宙儀を羨ましそうに眺めながら言う。

「これ、いいでしょ。先週届いたばかりなのよ。それを組み立てて昨日やっと完成したの。東条君は幸運よ」

何が幸運なのかいまいち分からなかったが、一応曖昧に頷いておいた。

「妹子は着替えてから来るみたいだから、それまで何か飲みたいものがある？」

「では、お茶を」

「はい」

そう笑顔で言うカウンターの向こうに消えていった。

妹子ちゃんの親は大分若く見えるが何歳だろうか。しかもあれで本当に男だったら城ヶ崎浜の大豪邸とメイドたち以上に驚異だ。

ドスン

「近くでどうぞ」

いつの間にか俺の目の前にいた妹子ちゃんの親が置いたのは、先程までカウンターにあったはずの宇宙儀だった。妹子ちゃんの親はそれだけを言うときさささと戻っていく。

ゆっくりとネジのほどけていく音を背景に、太陽系を模したその九つの球体はゆっくりと公転と自転をしている。相当忠実に再現されているようだった。

それにしても、俺は何しにここにやってきてしまったのだろうか。こんなことで時間を潰すくらいならば、昨日の城ヶ崎浜の誘いに乗っておくべきだったかもしれない。

すぐに戻ってきた妹子ちゃんの親は二つの湯呑みを置くと、テレビの電源を入れてワイドショーを見始めた。

そしてしばらくの間はテレビの中の人と妹子ちゃんの親の笑い声だけが響いていた。

第十四話 生徒プロフィール3

階段をドテドテと駆け下りてくる音がした。

「都靄君、ごめーんっ」

言い終わると同時に床に着地したようだ。それからすぐにリビングの扉が開き、妹子ちゃんが姿を現した。

「ごめん、と言っているわりになんかかなりおめかしをしている。そう言うくらいならおめかしは程々にして早く来てほしかった。別に制服でも構わないと思うのだが。」

「私ってさ、よく忘れちゃうのよね。だから都靄君のこともなんだよ。うん」

妹子ちゃんは一人で納得すると、俺の隣に腰掛けた。

「まあ、俺は平気だ」

「そう。あ、宇宙儀できたんだ」

宇宙儀を親と同じように羨ましそうに眺めている妹子ちゃんを見て、自然と俺の顔も綻んだ。

「ねえ都も……」

顔をこっちに向けて話しかけようとした妹子ちゃんの動きが止まった。

今日二度目の出来事に、俺はどうしたものかと色々と考えを巡らした。

結局。

俺は何をしにここにやってきたのか分からないまま帰宅した。唯一やった有益なことはお茶を一杯だけ飲んだことだろう。後は宇宙儀を見たことぐらいか。

途中電車に乗って一時間かかってやっと家に辿り着いた。

だが家の前に誰かがいた。俺の落ち着けない一日はまだ続くらしい。

「君は」

近付いて話しかけると、やっと俺がいることに気付いたのか驚いた顔をした。

「あ、お、おっはようござい、ざいまっす」

相当慌てているのか声が裏返っている。しかも今は夕方だ。挨拶が違う。

だがそこは流すことにして、その女子、岩井琴子に用件を聞く。
「岩井さんが俺に何の用かな」

岩井さんはしばらく口を金魚の様にパクパクさせていた。俺は辛抱強くそこから出てくる言葉を待つ。

どれくらい待たただろうか。日がもう沈んでしまったのだろうか、空が白い青から群青に変化していく。もう6時を過ぎたのだろう。

そんな時、やっと決心がついたのか岩井さんが口を開いた。

「お、お弁当……」

俺の手に持っている鞆を見つめながらそう言った。

そうだ、結局あの時、妹子ちゃんと教室に戻らずに帰ったから、岩井さんと城ヶ崎浜の弁当箱が入ったままだった。それを返してほしいのだろう。

「あ、大丈夫。明日洗って返すから。って明日は休みか」

「い、いえ、もともと、私が勝手に」

「いっていいって。食器洗い機に入れるだけだからさ」

「あ、あの、でしたら、私、東条さんの、家、に、おじゃ、ま、後半の方はほとんど聞こえなかったが、明日お弁当を取りに来てくれるのだろう。それならありがたい。」

「それじゃあ明日来てくれるかな。いつでも家にいるからさ」

「は、はい！ きつと、いえ絶対来ます。待っていて下さい。それじゃあ、また明日」

急に明るくなった岩井さんはそう言うと、駆け足で去っていった。

そこまで意気込まなくてもいいのだが。

家に入り、靴の中から弁当箱を三つ取り出して食器洗い機に入れた。電源をONにして作動したことを確認して、自室に行った。

いつものようにコンピュータの電源を立ち上げ、『生徒プロフィール』を開いた。

岩井琴子、いわい ことこ 拝島好乃の友達。料理は城ヶ崎浜よりもかなり上手。

恥ずかしがり屋だが積極的に純粋な女の子だろう。世話を焼くのも好きなのか。

夢星宇宙、ゆめほし そら 保健委員。いつも落ち着いていて、表情の変化も言葉数も少ない。いつも本を読んでいた気がする。印象が薄い。

貝川正、かいかわ ただし 保健委員。野球部に入るのか、坊主頭をしている。西翔の仲間。

西星杪、にしほし こうえ 二年生。関西弁で喋る。俺たち1年7組を学校案内で引率した。

さて、明日は誰が来る事やら。

俺は拝島好乃と色々話してみたい気がしていた。

第十五話 宇宙儀の組み立てセット

土曜日。

特に出かける用事も無く、今は岩井さん待ちだ。

そしてなぜか宇宙儀の組み立てセットがある。ただの宇宙儀でもなく、ただの組み立てでもなく、ただのセットでもない。明らかに宇宙儀の組み立てセットだ。とまあ、さっきから宇宙儀の組み立てセットと言って行数を埋めているのだが、別にストレスを発散している訳でもないし、宇宙儀の組み立てセットが好きな訳でもない。どちらかと言うと嫌いだ。

だが、宇宙儀や組み立てやセットは嫌いと言う程嫌いではない。宇宙儀は興味深いし、組み立ては安上がりだし、セットは注文し易いからだ。

.....

さっきから俺は何をやっているのだろうか。

まあ俺が宇宙儀の組み立てセットにどう思おうと、宇宙儀の組み立てセットがここにあることに違いはない。

送り主はM・J.とあった。

俺の知っている人々の中でイニシャルがMとJの人は少ない。例えば城ヶ崎浜三日月子とか。

イニシャルでない可能性も無いことはない。例えば横から見ると

つ

となり、点つ点シグマとなる。まあ、なったところでどうしようもないのだから。

色々考えたが、やはり該当者は城ヶ崎浜だろう。だがなぜ宇宙儀なのだろうか。

正午前。

昼食の準備をしようとキッチンの冷蔵庫を覗くと、玄関のチャイムが豪快に鳴った。

岩井が来たのだろうかとう当たりをつけて玄関の扉を開けると、案内定岩井たちがいた。

岩井琴子の他には、拝島好乃、叶かのつ鼎かなえ、夢星宇宙の三人がいる。折角なので宇宙儀の組み立てセットは夢星に譲ることしよう。

この四人の中では拝島が一番背が高かった。つまり全員が俺よりも5cm以上低いこととなる。そのため、全員を見下げることになった。まあ、だからといって何も問題は無いのだがな。

「岩井さんに拝島さんに、夢星さんに叶さんかな。俺の家へようこそ」

そう言つて扉を大きく開けた。

「し、失礼、します」

「おじやまします」

「初めまして、東条さん」

「……」

上から岩井、拝島、叶、夢星である。夢星は相も変わらず本を読んでいるが、よくそれで電柱にぶつからなかったものだ。

そう感心していると、中の四人は所在なさげにウロチョロしていた。

「汚い」

拝島が呟いたが気にしないことにして、全員を客間に案内した。

背の低い木製テーブルの周りに俺たち五人は座った。

先程リビングに戻った時に宇宙儀組み立てセットを持ってきたので、それをテーブルの上に置こうとしたところ、拝島に遮られた。

「東条君、昼食はまだ食べてないですか？」

何だろうと思いつながらも頷く。

すると叶がどこからか、いや体の陰から色とりどりのハンカチに包まれたものを四つ出してきた。

「これは？」

そう聞くと、拝島が答えてくれた。

「お弁当です。皆で朝から作りました。これが私、こっちが宇宙ちゃんのでこれは鼎ので、それが琴子のです」

続けて内容の説明だ。

「私は料理はあまりやったことがないので主食のおにぎりを作ってきました。梅と昆布と鮭です。宇宙ちゃんはハンバーグや唐揚げ、ウインナーなどです。鼎は肉じゃがや野沢菜の漬物などです。琴子はクッキーとかケーキなどです。一杯あるから足りないことはないと思いますよ」

「これなら充分過ぎるくらいだよ。ありがとう」

岩井は顔を真っ赤にしたが、他の三人はそんなことを気にも止めずに、弁当箱を開けていく。

復帰した岩井も手伝い、全部が露になったところでいただきますをしようとする、拝島が一言付け加えた。

「食べ終わったら、この屋敷を掃除しましょう。いただきます」

「はい。いただきます」「」

俺も四人に遅れながら言った。

「いただきます」

第十六話 掃除

五人での食事が終わると、拝島たちは本当に掃除を始めた。

まず家中の扉や窓を開け風通しをよくする。そうやって家の間取りの確認をしながら既存の掃除用具を集めていった。

間取りは、簡単に言ってしまうえば二階建ての正方形だ。真ん中には中庭がある。拝島はその中庭を見た時何か言っていたが、多分ここも綺麗にする気だろう。

玄関近くに戻ってきた俺たちは、そこに掃除用具を置いた。

「部屋数が、二階16部屋、一階9部屋。東条君がよく使っている部屋一室とキッチン、リビングにお風呂とトイレは今日はやらないとしても、20部屋あります。なので一人5部屋やりますが、やる部屋は早い者勝ちで決定しましょう。では、始め」

拝島がそう言い終わると四人は雑巾と箒を一つずつ持ち、奥に消えていった。

取り残された俺はすることも無く、客間で待つことにした。

宇宙儀の組み立てセットを組み立てること一時間、夢星が戻ってきた。早いなと思いきその理由を聞くと、

「雑巾不使用」

らしい。

箒だけで綺麗になったのか聞くと、

「充分綺麗」

らしい。

折角なので、宇宙儀の組み立てセットを譲ろうとすると、

「既所持」

らしい。って宇宙儀の組み立てセットを持ってるんだ。

俺がそれ以上質問しないことが分かると、手近な座布団に座って読書を始めた。

次に戻ってきたのは拝島だ。

「やっぱり宇宙ちゃんには敵わないですね」

そう呟いた。他にも似たようなことをやってきたのだろうか。

拝島は床の上にあった宇宙儀の組み立てセット解読書を見ながら、俺が宇宙儀の組み立てセットを組み立てていく様を見ていた。

次に戻ってきたのは叶だ。

「やっぱり三番なんだよ」

そう言って頂垂れる。

ということは、岩井がいつも一番最後ということか。

独特の口調で文句を言いながら窓際に座布団を持っていき、そこに座って外を眺めていた。

「何見てるの？」

と聞いてみると、こんな答えが返ってきた。

「雑草だよん」

もしかして、と思いもう一つ質問する。

「パセリ、好き？」

「もち」

好きらしい。

俺は宇宙儀の組み立てセットの組み立てを続けた。

あれから早二時間。一つ疑問に思い、どうやって掃除した部屋としていない部屋を区別しているのか聞くと、拝島はこう答えた。

「見れば分かります」

そんなに汚れていたのか。

三時間が経ち、さすがに心配になった拝島と叶は家を見廻りに行った。

程なく二人は岩井を連れて帰ってきた。岩井は泣きそうな顔をし

ている。

「どうしてこんなに遅くなったんだ？」

そう聞くと、代わりに拝島が答えた。

「全部の部屋が綺麗だったそうです。そんなはずは無いのですが」
少し考えた俺はその答えに思い至る。

「誰か、この部屋を掃除したか？」

俺の問いに四人は首を横に振る。そしてしばらく視線をさ迷わせるとまずは拝島が、続いて叶がハツとしたように俺を見た。夢星は読書を再開したので分かったのだろう。岩井はまだ分かっていないようだ。

「あのな、拝島さんが開始の合図をする前、何て言った。俺がよく使っている部屋とキッチンとリビングと風呂とトイレは今日はやらない、だったな」

拝島に同意を求めると頷いた。

「つまり、その除外した部屋にこの客間は入っていない。だから本来ならここも掃除をしないとイケないな」

「あつ、なら」

そこでやっと気付いた岩井は掃除用具を取りにいくためかここを出ようとしたが、俺はそれを止める。

「待て。掃除はもう充分だし、これ以上ここにいたら親とか心配するだろ」

「まだ4時なので大丈夫です。それに中庭がまだ終わっていません」

拝島はそう言うが、俺は女子にそこまでさせる気は無い。なので議論になる前に妥協案としてこう提案した。

「それなら、夕食を作ってくれないか」

四人は話し合いの末、それに同意してくれた。

宇宙儀の組み立てセットはまだ組み立て終わっていない。

第十七話 夕食の準備

「食材少なくなった」

冷蔵庫を見て食材が少ないと言う叶。

俺も覗いてみると、確かに少なかった。そういえば、この前の夕食でスープを作り過ぎた時にほとんど使ってしまったんだった。

「なら、今から買いに行くか」

これが騒動の元となることも知らずに、俺は気軽にそう言ってしまったのだった。

歩いて数分の所にある〇〇スーパー。普段はオースーパーと呼ばれるが、正式に何て読むのかは知らない。ちなみに、は二ボシ、はサンポウだ。高校の最寄り駅は×駅だが、これはペケ駅と読む。それと、九月の文化祭の名前は『煮干祭』だ。

四人だけで買い物があったらしく、俺は外で待たされている。拝島、岩井、叶、夢星の四人はすでに中に入り買い物始めているだろう。

宇宙儀の組み立てセットは、慣れていない俺にはまだ時間が必要なようだ。妹子ちゃんの親も一週間かかったって言っていたな。パッケージを見た時に同じ物だろうと思えたので、それくらいはかかると考えた方がいいだろう。

「君は、東条君だよな」

突然横から声があった。そっちを見ると江ヶ崎萌えがさきめくむがいた。

「ああ。江ヶ崎君、だったかな」

「そうそう。奇遇だねえ」

その棒読み加減からして、最初からつけてきたのだろう。それをわざと知らせるということは、次にくるのは脅し？

「それで、江ヶ崎君が何の用かな」

「いいや、何でもないよ。ただちょっと見掛けただけさ。それじゃ」

それだけを言うと、江ヶ崎は去っていった。あつという間に視界からいなくなる。

何がしたかったのかは不明だが、これから気を付けておくべきだろう。

そんなことがあってから一時間。四人が戻ってきた。

「遅かったな」

正直な感想を言うと、叶が言う。

「何を作るのかって話しが白熱してさー、結局全部作ることにになっただよ。でもでも支払う段になってお金が足りなくなっさー、何とか1万円に値切ったんだよ」

「足りなかつたらもつと渡したのに」

俺がそう言うと、それぞれ別の反応を示した。

「……」

「その手があつたかー」

「東条さんに悪いです」

「面倒」

上から、拝島、叶、岩井、夢星だ。

拝島はさつきから俺の背後を見ている。

「拝島さん、どうしたんだ？」

尋ねながら後ろを振り返るが、そこにはさつきまで四人のいたスパーしかない。

「あつ、いえいえ、何でもないです」

正気に戻った、というのが一番しっくりくる態度だった。

「まあ兎も角だよ、荷物は男が持つべきさー」

何となく居心地の悪い雰囲気になっていたが、叶の一言でそんなこともなくなった。俺にとってはそうでもなかったが。

ほとんどの荷物を持たされたまま家に到着した。いや、これから夕食を作ってもらうのだから、これくらいして当然だろう。

キッチンまでそれを運び、その後は四人に任せて客間に戻ってきた。

そして宇宙儀の組み立てセットの組み立てを再開した。

やっと各惑星の動きの基礎となる中央部分が組み立て終わった。

この調子ならば明日には完成するだろう。

休憩がてら宇宙儀の組み立てセット解説書を読んでいると、拝島がやってきた。

「東条君、料理をここに持ってくるのが大変だから、リビングに用意していいですか」

まあそれは俺も考えていたことだった。宇宙儀の組み立てセットがあるここだと狭いとも思う。

だから俺は一も二もなく同意する。

「いいぞ」

「では、もう少ししたら出来上がります。そしたら呼びにきますから、それまで待っていてください」

そう言っって拝島はキッチンの方へ去っていった。

俺は再び拝島が姿を現すまで、宇宙儀の組み立てセット解説書を見ながら宇宙儀の動作確認や明日使う部品の確認をしていた。

第十八話 夕食

それから十数分後、拝島に呼ばれてリビングへ向かうと、この家には久し振りの豪勢な料理が並んでいた。

「鼎は、実は料理人を目指しているんです」

俺が固まっていたからだろう、拝島がそう説明した。叶は恥ずかしそうに下を向いている。

「さあ、冷める前にいただきますしよう」

拝島は上座の席を俺に勧めた。そこに座る。

俺の右側に拝島と叶、左側に岩井と夢星が座る。

「じゃあ、いただきますか。いただきます」

「……いただきます」

俺に続けて四人も言った。

「東条君ってさー、こういう食事、何度も食べてるよね」

唐突に叶が聞いてきた。

「ん？ なんで？」

「食べ方だよ。一応きちつとした配膳とか配置とかしちやっだからさー、見ればマナーが良く分かるんだよね。それに手入れがされて無くてくすんでたけど銀食器が結構あつたね」

確かに、俺と叶は他の三人と比べ慣れている雰囲気がある。

叶は料理人になりたいのだから何度もこういう料理を食べ慣れているのは容易に想像できるが、俺の場合はそうでもないのだろう。

隠す必要もないので、その辺りの種明かしをする。

「俺の親父、つまり東条影偶かげぐち致ちかつて聞いたことあるか」

四人は食事の手を休めて俺の方を向き、首を横に振る。

「そうか。なら東条伊丹治いたぢは？」

「5年くらい前の総理大臣です」

拝島が答える。

「そう、内閣総理大臣やつてた。あれ、俺の爺ちゃん」

俺の爆弾発言に、夢星は食事をボソボソと再開し、他の三人はポカンとなる。

夢星がフォークを磁器の皿に当てる澄んだ音だけが響いた。

「まあ、驚くのも無理はないけど、ここは東条家の別荘。俺はその家系の直系に当たるな」

「「「え〜〜〜〜！！！！」」」

「……」

今度は夢星がポカンとなった。

他の三人が騒ぎ立てるのでその理由を聞くこともままならない。

「何で今まで言わなかったのですか、というより本当ですか」

「大驚きだよ」

「びっくりしました」

「……」

上から拜島、叶、岩井、夢星だ。

「まあ、言わなかったのは一応謝るとして。夢星さん、どうしたんだ？」

ビクッ

そんな効果音が聞こえてきそうな程、夢星は体を痙攣させた。いや、俺がさせたのかもしれない。

いつもに無い夢星の様子に、俺のことで盛り上がっていた三人も夢星を見る。

「どうしたの」

隣に座っている岩井が聞くが、夢星はただ首を横に振るのみだ。

どうしたというのだろうか。俺が直系と聞いた直後だった気がする。

「此処、何故？」

震える声で言う夢星は明らかに怯えていた。

質問の意味を考えてみると、おのずと怯える理由が分かってきた。夢星も『オトシモノ』を持っているのだろうか。

だが親父たちがどうだろうが直系だろうが、俺は総理大臣になるつもりは無いし、それに『オトシモノ』についてもほとんど興味は無い。

夢星に怯えられるいわれはないので、安心させるためにこう言った。

「大丈夫だ。俺は“君たち”に何かをしようと思っただけなんかないから。ただ協力してくれるとありがたい。無理に、とは言わないけどできる限り優しく言うのと、今日一日のことを思い出したのか夢星は落ち着き始めた。

話においてきぼりになっていた三人は、夢星が落ち着いたのを見て一安心し、食事を再開した。

食事も終わり、四人は帰り支度を始める。

さすがに二日連続で来るとは言われなかったが、またいつか来るそうだ。

夜も遅いので送ろうかと玄関まで行くと、そこにはなぜか城ヶ崎浜がいた。

「都囃様、宇宙儀の組み立てセットは気に入っていただけでしたよ。うか。昨日、瀬賀井さんから連絡がありました。ご用意させていただきました。今日はこれで失礼しますが、明日また参りますのでその時はよろしくお願い致します。それでは」

そう言うと、城ヶ崎浜は四人を連れて出ていった。

第十九話 生徒プロフィール4

玄関からいつものように自室へ向かう。

途中中庭を覗いたが、拝島が掃除したくなる気持ちも分からなくもないほどに草がボウボウに生えていた。タンポポの花が垣間見える。中央にあるはずの小池は全く見えないが、緑色になっているだろう。

自室に入るとコンピュータを立ち上げて『生徒プロフィール』を開いた。

拝島好乃、学級委員。黒髪をポニーテイルにしている。キチツとしている方が似合うように感じたが、実際はそこに至る過程が嫌いなのか服装は少し着崩していた。掃除をゲーム形式にしたことからも推測できる。リーダー的存在。苦手なことは料理らしいが、昼食のおにぎりが美味しかったのでそこまで酷いわけではないだろう。頭の回転は速め。そう考えると〇〇スーパーでの出来事は奇妙に感じられる。何を見ていたのだろうか。

岩井琴子。身長は低い方に入るだろう。肩まで伸びる茶色がかった黒髪はサラサラ。四人の中で一番ファッションセンスがありそう。特にこれといった特徴はない。俺に最初に弁当を渡し、またここに来ることを言い出した張本人。シャイだが行動力はあるようだ。

叶鼎。適当に付けたとは思えない気もしなくはない名前。少し不思議なイントネーションで喋る。よく分からないものを好きになる傾向が見受けられ、パセリが好き。将来の夢は料理人。昼食の肉じゃがから夕食のフランス料理まで、幅広いジャンルを作れるようだ。

夢星宇宙、保険委員。クラス内では杉目天の次に身長が低い。寡黙。読書好きで暇があればいつでも読んでいる。本の種類はランダム。頭の回転は天よりも速い。行動も素早い、これは面倒くさが

りの裏返しか。『オトシモノ』を持っているようだ。だがそのせいで東条家にトラウマがあるように見受けられた。いや、あれはPTSD、つまり心的外傷後ストレス障害に近い症状かもしれない。ちなみに、宇宙儀の組み立てセットを持っているらしい。

以上四人は城ヶ崎浜と友達のようなようだ。ファンクラブ会員の可能性がある。

江ヶ崎萌、男。身長は俺と同じくらいだが茶髪。学校にいる時は

律儀にも黒くなっていたから休みだけの特典だろう。髪が可哀想だ。

東条都靄、俺。備考として書いておく。父は現国会議員の東条影

偶致、父方の祖父の東条伊丹治は三代前の内閣総理大臣。まだ健在だ。東条家は政治家を多く輩出しており、『オトシモノ』と何かしらの関係があってもおかしくはない。ちなみに俺はこうやって一人きままに好きにさせてもらっていて、政界や『オトシモノ』にあまり興味は無い。今は学校を征服できればそれでいい。家出同然で出てきたが、両親その他が追ってこなくなかつここを使ってても文句がないことを考えると、黙認しているのかもしれない。

書き終えて、伸びをする。

それにしても、これからどうしようか。

よく考えてみると、征服する、というのがどういう状況になれば達成されるのかあまり考えていなかったかもしれない。何となく皆のリーダー的存在になればいいと思っていた。

人の上に立つ。学校でのそこへの近道は、やはり生徒会役員か。

斉藤尊、二年生。現生徒会副会長の彼女は次期生徒会長候補らしい。彼女の協力を得られれば生徒会役員になることも容易いだろう。生徒会選挙は七月の頭の夏休み前に行われる。それまでに協力をしてもらえらるような関係になっておこう。

第二十話 蔵等

日曜日、寝覚めは悪かった。

それが外からの音が煩いたためだと分かった時、部屋の扉がノックされた。

「都霧様、入ってもよろしいでしょうか」

城ヶ崎浜のようだ。だがなぜここに？

疑問には思ったが入られるのは困る。

「いや、着替え中だからリビングで待っていてくれ」

「……………」

返事がない。だが動く気配もなかった。

「どうした」

「はっ、いえ、なな何でもございませぬ。では待っております」
そう言っただけで離れていった。

別に着替える必要のない俺は、しばらくたってからリビングに向かった。

そこにいたのは、ほとんどの1年7組の女子だった。

安西美香華。岩井琴子。叶鼎。神崎天使。城ヶ崎浜三日月子。杉

目天。瀬賀井妹子。土居久子。七瀬せな。拝島好乃。日荒川翠。日

比野萌。夢星宇宙。

ここにいない女子は五人だけだ。

姦しいとはよく言ったもので、リビングは阿鼻叫喚の喧喧譁譁、

五月蠅並の煩さだった。

だがそれよりも大きな音が聞こえてくるのだが。

俺はこの中で一番話の分かりそうな杉目天に声をかけた。

「おはよう」

「おう、起きたか」

「何やってるんだ？」

「ああ、これか。三日月子が何か急にウエルカムパーティーしようって言うからさ、1年7組のあんたのファンクラブ会員が全員集合したんだ。勝手に邪魔してすまないな」

なぜこの家で城ヶ崎浜がウエルカムパーティーなんてするのだろう。ここは俺の家だから俺が主催者なら分かる。だが主催者は城ヶ崎浜のようだ。彼女は一体誰をどこに呼んだというのだろうか。

だが天に聞いても分からないだろう。

「いや別に大丈夫だ。大丈夫なんだが」

「何か駄目だったか？」

「いや、そうじゃなくてな。どうやって中に入ったんだ」

「それなら城ヶ崎浜のリムジンの運転手が開けてたぞ」

溝部といったか。裏では色々な駆け引きがあるのだろう。

「そうか。それともう一つ聞きたいんだが、外の騒音は何だ？」

「さあ。私は知らないが、重機みたいだな」

「重機？」

それで寝覚めが悪かったのか。何をしているのかは聞かないことにした。

視線を城ヶ崎浜の方向に向けると、真っ白なテーブルクロスの上に乗った軽食を食べていた。

その周りを叶鼎がコック姿で回っていた。

しばらく見つめてみると目が合い、彼女の方から近付いてきた。

「都霧君、おはようなの」

どこかで聞いたような台詞をどこかで聞いたようなイントネーションでどこかで聞いたような声色で言ってきた。

わざわざここで、そのどこかについて語る必要は無いだろう。俺の学校制服計画には全く関係無い。

「ああ、おはよう」

「都霧君、私、一生懸命にお料理作ったの。食べてくれる？」

微妙に本家とは違う気もしたが、それでもそっくりだった。

「あ、ああ。いいぞ」

なんだか俺も感染してしまったようだ。
もうどうにでもなれ。

朝食を食べ終わり、叶を含めた数人がキッチンで食器洗いをして
いた。叶によれば、食器洗い機は信用できないの、だそうだ。ちな
みにコックの服は、自分で作ったの、だそうだ。なんだか叶の性格
がガラッと変わったな。

その理由を拝島や夢星に聞こうとしたが、はぐらかされた。深い
事情があるのか、それとも本当に知らないか。

まあどちらにした所で叶自身が喜ぶとは考え難い。それにわざわざ
俺が心配するまでもないだろう。

客間に置いてある宇宙儀の組み立てセットを心の隅に置きながら、
姦しい女子たちを見る。そしてこれからどうしようかと内心で溜め
息をついた。

第二十一話 枯山水

「なあ城ヶ崎浜、外で何やらせてるんだ」

キツチンからキヤイキヤイと声が聞こえる中、俺は椅子に腰掛けた城ヶ崎浜に聞く。

「耕しているのですわ。あのような荒れた土壌では花も育ちませんわ。心配でしたら見ていらしてはいかがでしょう」

「ああ、そうさせてもらおう」

そう言つて俺は外に向かった。

シヨベルカーが一台。掘り返される土。それに伴い見えなくなつていく雑草たち。

俺はそれに手を合わせながら、変わりゆく庭を眺めていた。

それにしてもこうやって庭をしっかりと眺めるのは初めてかもしれない。

さすがに城ヶ崎浜の大豪邸ほどではないが、それでも一般家庭の庭よりも大きい。ここに池やら松やら梅やらを配置すれば、立派な平安時代の貴族の庭になるくらいの大きさだろう。

「私考えましたの。昨日こちらに伺つたときに、これでは家が可哀想だと。ですからこうして庭から変えていこうと思ひましたの」

「その結果が、シャベルカー」

「そうですね。ですが都霧様、シャベルカーではなく、シヨベルカーですわ。それと、こちらが完成予想図になりますの」

そう突っ込んだ城ヶ崎浜は俺に一枚の紙を渡してきた。そこに描かれていたのは適当にデフォルメされたこの鳥観図で、その上から様々な色が塗つてあつた。

「たくさんの花を植えようと思ひまして、鉢植えを持ってきましたわ」

指差す先を見ると隅に置かれた巨大なラックに鉢植えが所狭しと

並んでいる。

何となく、このままではいけないような気がした。メルヘンになる悪い予感だ。そこで俺はこう提案した。

「枯山水は、どうかな」

すると城ヶ崎浜はすぐに賛成する。

「さすが都霧様ですわ。私たちは考えが及びませんでしたわ。早速そついたしましょう」

そう言うと、作業を指示している中年の男性の所に歩いていった。男性は一瞬渋い顔をするもすぐにニコリと笑った。交渉成立か。

男性が指示を出し始めるのを確認した城ヶ崎浜はこっちに戻ってきた。

「ここは今日中に立派な日本庭園になっておりますわ。では、私はこのことを皆さんに伝えないといけませんので、失礼いたしますわ」
皆さんとはリビングやキッチンにいる女子たちだろう。

俺はここにおいても仕方がないので、宇宙儀の組み立てセットを組み立てることにした。

ふと、一つの俳句が思い起こされた。

夏草や 兵どもが 夢の跡

宇宙儀の組み立てセットは惑星部の機構が面倒だった。中央部に繋がる細長いフレームの先に台座や自転させるための歯車を組み込んでいくのだが、付属のピンセットを使わないと部品をつまみ組み込めないのだ。その上、無駄に複雑な構造をしていて間違えることもしばしばだった。

しかも近くでは常に重機の音が、そして時々遠くから女子たちのキヤイキヤイする声が聞こえてくるのだ。

作業は遅々として進まなかった。

やっとのことで水星を終えて時計を見ると12時を過ぎていた。もうそろそろ昼食の時間だ、と作業を切り上げてリビングに向かう。

そういえば、家は静かになっていた。外の重機の音や人の声も聞こえない。

少し、そうほんの少し不安になり速足でリビングに向かう。一向に聞こえてこない話声が俺を焦らせる。

リビングに入ると、そこは無人だった。キッチンに行く。そこも無人だった。リビングに戻る。

落ち着け。

ただ帰っただけだ。客間に声をかけて、俺が気付かなかったただだ。そう、それだけのことだ。

深呼吸を何度かし、落ち着いた所で昼食を作るためにキッチンに向かった。

足音が家全体に響いているような気がして落ち着かないが、さっきまでと比べると断然落ち着いている。

何歩か歩くと、足下が柔らかくなり足音が急に消えた。見ると黄色い皮がある。

そして視線は勝手に上に向かい、天井が見えて

第二十二話 マソヒスト？

目を開けると、そこには顔があった。

「大丈夫？」

その内の一人が喋る。

俺は頷く。そして、顔が退いたのを見て、上半身を上げた。

見回すと俺は客間のソファーに横になり、その周りを女子たちが取り囲んでいた。

こうなつた経緯を思い出してみる。

俺は宇宙儀の組み立てセットにきりをつけて昼食を食べにリビンググにやってきたが誰もいず、キッチンの方かと思いい向かう途中で黄色の皮、つまりバナナで転んだわけだ。

以上。

短い回想も瞬く間に終わる。

「ごめん」

突然、天が謝ってきた。

「私、あんたの面白い姿を見ようとして悪乗りしすぎた。本当に、ごめん」

そう言つて頭を下げる。

俺はしばし啞然としながらも話しかけた。

「いや、いいよ。バナナの皮で転ぶなんていう貴重な体験ができてよかった」

.....

俺ってマゾか？

呆然とする皆を見て、そう思った。

俺がキッチンに着いた時にはすでに昼食の準備ができていた。そ

れを食べながら城ヶ崎浜に話しかける。

「なあ城ヶ崎浜、これからどうするんだ」

ちぎったパンを頬張りそして飲み込んで、たっぷり時間を使ってから返事がきた。

「私たちは、中庭を掃除したいと思っております。いかがでしょう」
「いかがでしょう、って言われても、答えようがない。ていうか今までもさんざん俺の周りで色々やってきた彼女たちのことだ。俺が何と言おうとやるのだろう。」

「いいぞ」

それだけを言った。

俺は客間に戻り宇宙儀の組み立てセットの組み立てを再開した。
今ごろ女子たちは食器洗いをキャピキャピ楽しんでいることだろう。いつの間にか妙な方向に話が進んでいる気もするが、しばらくはこんな感じでいいと思った。
生徒会についてもまた後で考えよう。この調子で知り合いの輪が広がっていけば大丈夫だろう。

金星の機構ができた頃、夢星が客間に顔を出した。

「助力要請」

どうやら城ヶ崎浜が手伝ってほしくて夢星をよこしたようだ。俺は勿論行く気はないのでこう言った。

「病人にそんなことさせるかな、普通」

「仮定東条病人、結論暇。今暇？」

「いや、暇じゃない。なんせ」

続けようとするのを夢星が遮る。

「東条否暇、一般論否病人。結論助力可能」

つまり、俺が病人なら暇だから手伝え、俺が暇でないなら病人ではないのだから手伝えるだろ、というどちらにしても手伝わされるという暴論だ。

そんなことに内心抗議していると、夢星が言った。

「此異配順」

夢星の指差す方を見ると、後は球形のカバーを付けるだけとなった金星の機構がある。

「異順序」

もう一度夢星が言ってやっと意味が分かった。組み立て方が違うのだらう。

「教えてくれるか」

「可能」

そんなこんなで夢星と共に宇宙儀の組み立てセットを組み立てる事になった。

昨日みたいに夕食までいるのかと思ったがどうやらそうではないようだ。

リムジンに乗り込む13人の女子。

「また明日」

と言いながら中に入っていく、最後に溝辺が一礼をして運転席に乗り込み出発した。

中庭の掃除を手伝わなかったことに対する文句がなかったことに安心しながら俺はそれを見送り、そして様変わりした庭を見る。

「枯山水」

それはもう見事な日本庭園と化していた。昨日までの無法地帯と同じ庭とは到底思えない。

錆びていた門柱と門扉は白い石柱と木製のスライド式の扉になり、その上には瓦の屋根が鎮座している。今そこをリムジンが通過した。そこから俺の今立っている玄関まで細かい白石で敷き詰められており、その両脇には黒い石が並んでいる。その外側には石で描かれた川や所々に大きめの石がある。外壁の近くには大きな紅色の石が一つあり、その周りに松が植えられている。

俺の思った通りの枯山水だった。

一日でここまでする職人はすごいと思った。

第二十三話 生徒プロフィール5

客間に戻り宇宙儀の組み立てセットの続きをする。次は地球だ。必要な部品を取り出して始めた。

作業をしながら昼間のことを思い返す。

そもそものきっかけは天の、都囂っていじめがいがあるよな、という発言だったらしい。これによって俺はわざわざバナナの皮で転ぶことになったのだ。

この間の黒板での出来事も天だったことから考えると、どうやら城ヶ崎浜たちは俺をいじめることに快感を覚えるらしい。

.....

サドか。

ここにSMの関係が生まれた。

なわけがない。俺は違う。断じて違うぞ。

作業も慣れてきて、夕食の時間には地球はほぼ完成した。

休憩がてらキッチンに向かい簡単な夕食を作る。昨日大量に買い込んだおかげで、材料は無尽の様相だ。

そこから適当に材料を取り出し、味噌汁を作る。

フライパンで肉や野菜を炒めて、肉野菜炒めの完成。

ご飯をよそり冷蔵庫から葉が作りおきをしてくれた惣菜をいくつか取り出し、それらを持ってリビングにいった。

綺麗になったことで淋しさが増したこの家は、俺にとってはただの寂しいだけの家でしかなかった。

夕食を食べ、キッチンに戻ってきた俺は客間で地球の仕上げをした。

それが終わると、いつものように自室で『生徒プロフィール』を編集する。

安西美香華^{あんざい みかげ}。眼鏡をかけてポニーテイルの黒髪を背中の中程まで垂らしている。背は高い。弓道部や茶道部が似合いそうだ。

叶鼎^{かんぎき}。性格が今日は変わっていた。多重人格者か。

神崎天使^{かんざき えんじえ}。天使という名前の通り白い餅肌をしていて、頭の上に輪を乗せ白い羽根を背中に付けたら似合いそうだ。背は低め。

城ヶ崎浜三日月子。他人の家に勝手に入り、そして庭を勝手に改造した首謀者か。万が一にも親たちが裏で画策していたら面倒だ。

城ヶ崎浜は経済界の五大グループの一つ。田奈浜、城ヶ崎浜、夜浜^{やはま}、小野浜^{おのばま}、向浜^{むかいはま}の五つが五大グループと言われている。そして一方で東条は政治界の五大一族の一つらしい。あまり興味はないが、このせいで面倒事が起こることは看過できない。

杉目天。俺をいじめるのが趣味になりつつある。反省はしていたようだが止めてほしい。

土居久子^{とぐ ひさこ}。くせつ毛で、首まで伸びる髪は外に向かってはねている。あまり喋らないが肝心の所で巧く全体を動かす発言をしていた。勘が鋭そう。

七瀬せな^{ななせ}。小動物とはああいふ女子のことを言うのだろう。身長は杉目天、夢星宇宙について下から三番目か。逆から読んでも、なせせな。自己紹介の時にそう自分のことを称していた。……あれ、微妙に違う。なせせなが正しいか。

日荒川翠^{ひあらかわ みどり}。城ヶ崎浜とは昔からの知り合いのようだ。髪がブロンズ、目が碧色^{みどり}をしている。父親が外国人。だがこの苗字をどこかで聞いたことがあるな。

日比野萌^{ひびの もえ}。下の名前が江ヶ崎萌^{えがさき}と同じ。歩く都度に膨らむ茶色気味の黒髪が特徴。おしとやかなお嬢様といった感じ。

夢星宇宙。漢字だけで喋る。そのために時々分かりにくい表現になるが、的確な発言が多い。

岩井琴子、叶鼎、拝島好乃、夢星宇宙の四人は東条都靄ファンクラブに入ったようだ。

手を組み腕を伸ばす。

それにしても入学してから色々なことがあった。まあそのおかげで輪が広がったのだが、反対に悪い予感みたいなものを感じる。江ヶ崎萌のことが一番気になるが、それ以外にも拝島や城ヶ崎浜、夢星や叶にはまだまだ不確定要素がありそうだ。

明日から新しい一週間が始まる。

第二十四話 果たし状

「おはよう」

「おはようございます」

「おっ……は」

「お、おはごまいます」

この前出鼻をくじかれた角で杉目四人が待ち伏せをしていた。

「おはよう」

他に誰もいないことに安堵しながら挨拶を返す。

四人は俺の左に横一列に並びながら学校に向かう。こうやって見ると本当に容姿が似ている。

「お姉ちゃんが昨日は失礼しました」

昭がいつかのように謝ってきた。バナナの皮のことだろう。

「大丈夫だよ、こうやって無事に登校できてるからさ。それにしても晴ちゃん、登校できるようになったんだね」

「はい、元気になりました」

晴はうつ向きながら小さく言葉を返してきた。
ところで。

さつき見た時は誰も近くにいなかったはずなのだが、今誰かの視線を感じていた。

バツと振り向いたが見付ける事はできなかった。

「どうしましたか？」

「いや、なんでもない」

あの視線に殺気が込もっていたのが気のせいであってほしいものだ。

昼食は岩井と城ヶ崎浜の二人が作ってきた二つのお弁当を食べた。二人が睨み合っていた気もしたが、どっちも美味しいと言っておい

た。

そして授業はとばして放課後。

果たし状

それが下駄箱に入っていた。内容は、体育館裏に來い、という典型的なもの。

お前らいつの時代だよ、と言いたくなくなった。

だが特に断る理由も無いので、一緒に帰ろうとしていた妹子ちゃんとは別れて来てみたのだが。

「xゲーム？」

「そうだ。俺とxゲームで勝負しろ」ということらしい。

一応ルールを聞いてみたが、やはりあの中々勝てない、それでいて負ける事は絶対にならない3x3のxゲームらしい。

「ところで、何でxゲームなんだ？」

「その理由は、聞くな」

ああ、いじけちゃった。

「と兎も角、時間も無い。さっさと始めるぞ」

「はいはい」

何か、もう何が何だか。何で何なんだろう。何でもあり、何だろう。

机を挟むように椅子が二脚、なぜか置いてある。わざわざ教室からここまで持ってきたのだろうか。

彼が一つの椅子に座ったので、俺はもう一方に座った。

結果は分かっている。引き分けだ。

ジャンケンで俺が先攻になった。

まずは順当に真ん中にxを書く。相手は俺から見て右下にxを書く。続いて俺は左上にxを書く。相手が右中にxを書く。俺が右上にxを書く。相手が中上にxを書く。俺が左下にxを書く。

「ま、負けた」

で、俺はなぜそんなにうちひしがれているのか気になるものの、これ以上の不毛な勝負を避けるためにそそくさと帰宅した。

ちなみにあの男、クラスメイトの中澤次郎である。江ヶ崎萌とよく話していた一人だ。

そういえば、果たし状を出した理由を聞くのを忘れていた。

まあ大体の所はわかる。嫉妬だろう。

家に帰ると、玄関前に妹子ちゃんが立っていた。その隣には天もいる。

「遅かったね、都靄君」

「まあ、ちよつとな」

説明するのも面倒なので適当に流しながら扉を開けて、

「おかえりなさいませ、ご主」

閉めた。うん、いい運動になった。

「それじゃあ、外で飯食うか」

頭の上にクエスチョンマークのある二人の手を取り、歩き出す。

二人の顔が赤くなつたのはなぜだろうか。

兎も角、歩き出

「ちよつと待って下さいよ。無視する事はないじゃないですか、ご主人様」

そうとすると、さつき見たような見てないような女子が追い縋ってきた。

仕方ない。対応しよう。

「で、勝手に人の家上がり込むのは犯罪だ。不法侵入だ。分かるか？」

むすーつとする彼女。

ちなみに今の状況はこうだ。手が二人と繋がったままの俺を、彼女は前から抱き絞めながら見上げている。

「ご主人様。いえ、東条君。これだけは言わせて頂きます。クラス
メイトに向かつて何ですかその口のききかたは」

ブロンドの髪に碧の瞳。俺はなぜ最初に名前を聞いた時に思い出
さなかったのか、今更ながら後悔していた。

日荒川翠。ひあらかわ みどり 東条家に先祖代々遣える日荒川家の一人だった。

第二十五話 理由

とりあえず家に入り、日荒川から事情を聞くことにした。

「私からひるめ様に頼ませて頂きました。ひるめ様は直ぐに承諾してくださいましたよ」

東条ひるめ。俺の母だ。

「何でまたここにわざわざ。ある意味左遷だぞ、これ」

「そんなことはありません。ご主人様が次期当主になると、この日荒川翠、確信していますから」

勝手に確信しないでもらいたいものだ。

「聞きましたよ。ご主人様は 高校の征服を計画しているとか。現在の当主であられる影偶致様かげぐちとよく似ていますよ」

「俺はあんなよく分からないモノを探求する親父の気がしれないよ」
なぜ俺の計画を知っているのかは聞かない事にする。

と、さっきまで傍観していた二人が会話に入ってきた。

「都霽君って、お坊っちゃんまだっただ」

そう妹子ちゃんが言うつと、頷きながら天が言う。

「そうだな。東条影偶致っていつたら、あの東条伊丹治元いたち総理大臣の息子だしな。ところでその東条影偶致が探求しているっていうモノって、何なんだ？ あと都霽、学校を征服するのは本当か？」

俺はその核心を突く一つ目の質問に、淡々と答える。

「親父の探求してるモノについては俺からはノーコメントだ。新聞部なら話してくれるかもな」

そこで区切る。

俺は正直二つ目の質問について迷っていた。ここで話してしまうてもいいものか、と。

そこに、隣の日荒川が口を挟んだ。

「ご主人様、嘘は信用を無くします。何事も未踏に辿り着いてこそ、ですよ」

はつきりと告げられたその言葉に、俺の心は決まった。
「分かった、言おう」

といつてもそこまで仰々しく話すような内容でもない。ものの一
分で説明は終わった。

どんな反応がくるのか不安でもあり楽しみでもあったが、意外と
あっさりしていた。

「そっか。楽しそう」

「大変だな」

それからいつの間にか女子三人で話が弾み、俺は蚊帳の外だった。

妹子ちゃんと天が帰り、夕食をとろうと日荒川に声をかけた。こ
れに対して彼女は。

「私目などがご主人様と食事をとるなど、考えられません」

と言うと、配膳を終えてどこかへ出掛けてしまった。

別に誰と食事をとろうが、大丈夫だとは思うのだが。あと、一人
よりは二人で食べた方がいいに決まっている。

勿論、今までの短い人生の半分は独りでの食事だったから、慣れ
てはいる。

それでも、だ。わざわざ別々に食べることもないだろうに。

俺が食べ終わると、日荒川が食器を片付けにきた。さすが日荒川
家の血を引いているだけあって行動が素早い。

ちなみに、料理は叶には一歩及ばないものの、充分美味しいと思
える味だった。

「私の苗字は日荒川、ひいては東条家に遣える者ですが」
突然手の動きを止めて、日荒川は話し出した。

「昨日までは城ヶ崎浜三日月子様の御屋敷、つまり田奈浜たなはま弥羅和様
赤沙様あかさのお側におりました。少々田奈浜家の方がごたごたしていた

そつで、水無月李梨様みなつきりじから御相談を受けました」

学校では城ヶ崎浜のことを月子ちゃんと呼んでいた。公私をしつかりと使い分けているのだろう。

「その水無月李梨つてのは」

「私の伯母に当たる方で、田奈浜吾郎様たなはまごろうとは古い御友人だと聞いています。ご令嬢のお二人をごたごたに巻き込みたくないと言水無月李梨様に御相談されたそつで。そこで、同じ学校に通っている城ヶ崎浜三日月子様、田奈浜弥羅和様、私、そして赤沙様が一所に集まっています。ですが先日、ごたごたが治まったという連絡を受け、城ヶ崎浜三日月子様の御屋敷を離れなくてはいけなくなりまして。そもそも遣える者の姓の違う同士が同じ御屋敷に何日もいる、というところが不自然ですから。そこで、私はせつかくだから、と本家ではなくこの別荘でご主人様の御世話をさせていただくことにしました」

言い終えると、これで話は終わりとはかりにさつさと下膳をして、リビングを出ていってしまった。

第二十六話 放棄と電話

俺は執事やメイドについて詳しく知っているわけではない。

なのでリビングに戻ってきた日荒川に聞くことにした。答えの中には初めて耳にする内容もあった。

「私達メイドは大きく分けて二つに分かれます。プライベートメイドとハウスマイドです。プライベートメイドは要人の方一人一人に付く専任メイドで、秘書のような役割を担っています。一方のハウスマイドは、各屋敷ごとに付くメイドで、このメイドが全体の9割を占めています。」

メイドには多くの不文律があります。例えば主人との接触は必要最低限にするとか、制服を着ている時もそうでない時も常に気を配るとか、中での出来事は例え身内であっても口外しないとかです。その中の一つに、ハウスマイドは他の屋敷に行くべきではない、というものがあります。今回私が城ヶ崎浜様の御屋敷にいられたのは、単にひるめ様の御助言があったからです」

「でもそれで何でここに来る事に」

「学校から近いですし、何より田奈浜御姉妹の御屋敷や城ヶ崎浜三日月子様の御屋敷に近いですから」

そう笑顔で答える日荒川に裏は無いようだった。

それならそれで有り難いと、またわざわざ母に逆らう事も無いだろうと思ひ、俺からも正式にここに住まう事を許可しよう。

「分かった。日荒川翠さん、主人として正式にここで働いてもらうよう、お願いします」

「よろしくお願ひします。ですが、まず始めにお願いしたい事が」「何だい」

「若い男女が二人きりで日々を過ごす事になりますが。変な気を起こさないでね、東条君」

後半軽いノリになったかと思うと、リビングを出ていった。

後には首を傾げる俺だけが残された。

日荒川は一階の部屋で寝ている事だろう。

客間に移動し、最近恒例になった寝る前の宇宙儀の組み立てセツトの組み立てを始める事にした。今日は火星だ。

それにしても、これからどうしようか。

『学校征服計画』と銘打ちながら、結局は何も考えていなかった。夕食前に妹子ちゃんと天と日荒川に話した時も、ほんの一分足らずで話し終わってしまった程だ。

生徒会長になる。だからといって征服した事にはならないだろう。何が足りないのだろうか。

辞書で調べてみた。

<武力で敵を負かし、支配すること>

武力、か。苦手分野だ。それに、現代はそんな支配方法よりも有用なものがあるだろう。

考え方を少し変えて、どうなるか、つまり目標を考えてみる。

……

……

……

…

無いな。

例えば誰もが俺の言いなりだしよう。すると、テストが無くなるとか、本当に限定的な事しかできない。コミュニティの巨大な、例えば国家とか、ならば大分色々できるだろうに。あとは、この小説が全年齢対象では無くて¹

思考が自分でもよく分からない変な方に向かったが、まあ俺に学校を征服する気持ちが無い事が分かった。

ただ入学式の日の決意は無に帰させたく無く、また妹子ちゃんや天や日荒川に言ってしまった手前、理由も無く退きたくは無かった。それだったら、何もしないよりは何かしていた方がいいだろうから、このまま終わる事の無い無計画な計画を進めていこう。

そんな事を考えながらも宇宙儀の組み立てセットの火星は早々と組上がった。

この調子ならば今週中には完成するだろう。

寝ようと廊下にでた時、突然電話が鳴りだした。

広い家に響き渡るダイヤル式の電話の金属音。俺がこの別荘にやってきてから初めての事だった。

流石と言っべきか、日荒川がすぐにやってきた。

「ご主人様、お電話ですが出られますか」

そう聞いてくる日荒川はさっきまで寝ていたのだろう、大分薄着だった。

初の事態に戸惑っていたのに気を利かせたのだろうが、俺はそれに答える事はせず、走って電話のおいてある唯一の部屋、リビングに向かった。

何だか嫌な予感がする

そう直感的に思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5521g/>

学校征服計画H

2010年10月22日00時50分発行